

加能連歌壇史藁草・その二(中)

— 能順伝資料・その八 —

棚町知彌

要旨 本誌11号に発表した「能順伝資料」のその五

加能連歌壇史藁草・その二(前)

ならびに、後記する各稿を承けての、文字通りの「続稿」であるが、本稿ではとくに、大阪大学文学部国文研究室所蔵・合翠堂(土橋)文庫資料により、延宝年間の能順を中心とする北野宮仕中の好士の修鍊の一端をうかがう。

北野天満宮の連歌資料として別にとりまとめるべき慶安五年・元禄十五年両度の万句には、能順の参加が顕著である。その余の能順の作品は統稿・その二(後)において、ほぼ全容をまとめる見込みにある。

能順伝資料翻刻一覽

- (一) 北野学堂連歌史資料集(貞享年間)
〔近世資料と考証〕 7号、昭49年2月刊
〔文藝資料と考証〕
- (二) 能順伝資料・その二(預坊時代・前)
〔有明高専紀要〕 11号、昭50年1月刊
〔有明高専紀要〕 12号、昭51年1月刊
- (三) 能順伝資料・その三(預坊時代・後)
〔有明高専紀要〕 12号、昭51年1月刊
- (四) 宗因点『延宝五年 北野三吟連歌』
〔近世資料と考証〕 10号、昭53年2月刊
- (五) 加能連歌壇史叢草・その二(前)
〔国文学研究資料館紀要〕 11号、昭60年3月刊
- △作品一▽明曆2年9月25日 玉何「松に菊」利常等
 △〃二▽明曆3年8月25日 何田「千世の秋」利常等
 △〃三▽寛文2年11月8日 初何「庭やこれ」宗因等
 △〃四▽寛文4年5月吉日 夢想「夢はいつくそ」元林等
 △〃五▽寛文8年9月 正的独吟 白山法菜「花の名を」
 △〃六▽寛文9年正月吉日 夢想「玉松も」能順・春林等
 △〃七▽「延宝初頃」何路「五月雨は」能順・政長等
 △〃八▽元禄4年6月7日 何衣「雪遠く」
元故・瑞順・能順三吟
 △〃九▽元禄4年7月 何路「下萩の」政右・応信等
 △〃一〇▽元禄4年10月5日 追悼「はゞき木の」
能順・瑞順両吟
- △〃一▽元禄5年正月18日 何船「晨明の」能順・直忠等
 △〃二▽元禄12年正月 山何「夕月夜」日祥・快全両吟
 △〃三▽元禄16年9月18日 花何「村薄」踞道・能順等
 △〃一四▽宝永4年11月28日 能順一周忌追善独吟(自注)
「氷るなよ」欲生
 △〃一五▽正徳4年12月21日 何人「一村の」
瑞順・慶阿両吟
- △参考一▽『燕台風雅』抄
 (一)今枝近義(宗二・直恒・直方)
 (二)奥村徳輝(三)竹田(忠種・)忠張
 (四)津田孟昭(五)本田政敏(六)脇田直能
- △能順一▽「能順天和三年より発句書留」
〔連歌研究の展開〕 昭60年8月、勉誠社刊
- (六) 能順時代人の連歌史観・参考資料
〔国文学研究資料館紀要〕 12号、昭61年3月刊
- (七) 翻刻・聯玉集(乾・坤)
附・能順交遊人名索引(稿)
〔国文学研究資料館紀要〕 12号、昭61年3月刊
- 他に
 『白山万句―資料と研究』(昭60年5月、白山比咩神社刊)所収
 加能連歌壇史叢草・その一
 があり、その内容の概要は本稿末尾(二四六ページ)に収める。

板津正的作品抄・つづき

—『白山万句』p.483~486・
—〈作品(前)七〉p.214~216参照—

△作品(中)一▽

東北大学狩野文庫所蔵、写本『連歌集』

△狩一四—一〇九五—一—▽による。

明暦四年六月廿八日

岩岡(マ)駿校興行

「岩舟検校」(句上)

うれしさの宿よりあまる泉哉

昌程

茂りて松のかけふかき庭

城泉

卯花はふりをける雪の詠にて

昌陸

月に程なくあけほのゝ空

昌隠

秋風やかりねの夢を誘ふらん

長眼

はしゐせし夜に雁の来る声

城空

白妙に真萩の上の露みえて

連弥

野辺にいつれは晴る朝霧

正的

ッ 日のかげや小沢の水にうかふらん

城湖

水なかるゝ田つらはるけし
萌そむる草村毎の青やかに

春駒(マ)とやいさみ行道

雪の後山立ならすかりころも

あけてあらしのたゆむ篠はら

霰や岩ねの松のうす煙

磯屋にあまのもしはたくらし

長雨も晴れはなきし浦の波

くれひやゝかに住吉の月

又もこん祭近つくおとこ山

大宮人の霧わくるみち

かさしにと折は袂も花の露

春おしまるゝ藤の誰彼

ニ いさまちてやよひに聞ん□鳥

音つれすてし窓の鶯

冴回こすの外山に日は入て

をく霜しろき園のくれ竹

仕業とて夏苧や賤か晒すらし

守治

安一

執筆

泉

程

隠

陸

空

眼

的

弥

治

湖

程

一

陸

泉

眼

たゆるあつさはさそな草茨

心から清きは玉のみきりにて

にほひや露に残る権

暴風たつ跡はのとけき月の下

むなしきやとりおもひやる秋

妹とひし里はあれつゝ冷しみ

わか泪をもそふる鹿の音

今朝までも木葉散しく旅衣

こゆへきかたや霜の山道

ニウ 冬来れば柴取運ふ手を寒み

度く酒をくむ市の場

濁世としるは心のかくれ家に

時にしうつる人のかしこさ

春秋をたねとしてよむ和哥

山もとくるゝこのみなせ川

側かなる霧間の月は影淋し

露ふく音もかはる初風

鳴虫をとめよりぬれば袖涼し

隠 たりこし野ゝ跡はるか也

弥 里くのさかひや雲の埋むらん

空 雪を木すゑの柳いくむら

湖 葛城のみねはえならぬ花盛

一的 ころものとけき行ひの声

一 三二月の別を慕ふ寺ふりて

治 そでの雫もまさる雨の日

泉 問こぬを恨て歎く此ゆふへ

程 あすの命もたのみなき中

隠 いさむるは親のすゝむる学にて

陸 あはれにつらね出ることの葉

的 撈船を霧やへたつる明石瀉

眼 しつまりぬらしうらの秋風

程 打なひく声のほなみの村くゝに

一 深田のおもの色になる比

空 露霜を重てうつる夜半の月

泉 独ふすまはかつきてもうし

湖 積りそふ枕の塵をはらひかね

弥

治

隠

陸

程

一

的

眼

治

程

湖

泉

陸

弥

空

的

程

隠

三ッ
はかなよはひもしるき落髪
例ならぬ身とて退く宮仕

左遷ぬるはいかになしき

見わたせは花もなけなる沖つ鳥

はてはかすみに遠き海つら

別行雁は雲ゐに飛消て

明かたふかくさはく友鶴

真砂地にうち散雪のいかはかり

吹しく風に残るしら菊

小薄も籬となりて陰高み

外面のむしははたをおる声

露かゝる草の戸さしはかため置

すてゝ浮世の月も見ぬ人

おもひ出て忍はしいかゝ身の昔

色このむ名の立てくるしき

名
いとゝしきもの疑はいかゝせん

こなたはしらぬうらみなりけり

誰か今乱せる国のまつりこと

一 陸 眼 程 隱 湖 弥 空 的 治 程 一 陸 泉 的 湖 程

かへりみもせぬおこりあやしき

ならへぬる道の車も先立て

瘦ぬる駒や重荷おふらし

草刈のそても濡そふ夕時雨

かの岡こえにまよふ八重霧

月遅き末のかけはし行やらて

ふまんなあたらかけの紅葉ゝ

酔ぬるや円ゐにたえぬ小松原

跡たれし野にあふく神事

こちたきは今日の小汐の行幸にて

君と臣のちぎり久しき

名ッ
望むこそ其程くゝの位なれ

あけもみとりもまじる衣手

このくれに催し出しまりの友

やかて小弓や引すてにけん

所えて蝶鳥遊ふ春の野に

かすみのまかき日は静か也

咲花も大内山はときはにて

治 陸 一 泉 隱 弥 陸 治 程 的 空 湖 一 程 的 陸 的 隱

梅散ぬれはかほる山ふき

泉

昌程 十三

松坂換校
連弥 七

岩舟換校
城泉 九

正的 九

昌陸 十一

城湖 八

昌隱 十

守治 八

長眼 八

安一 九

城空 七

右勃 一

△参考・その1▽ 右の百韻につづけて、左の百韻が収めら

れている。「序的」あるいは「正的」と同一人歟。

「鳴雁の月をみせたるね覚かな 昌隱」

昌隱 13

他阿 11 祖白 13 覚阿 12 安一 11

聴意 8

序的 7 城空 8 (覚阿) 弥阿 9

祖阿 7

執筆 1

興行年時なし。句上なく、句数は編者補。

△参考・その2▽ 『国文学』63号(昭和61年10月)に鶴崎裕雄・

田中隆裕両氏により紹介された

頼政神社蔵「諸大家連歌帖」の(11)に

寛文四年四月廿六日

賦唐何連歌

忍ひ音や待人はつる霍公

初卯の花をめてはやす暮

山里の垣ねに夏の月出て

水のをとそふ雨は晴けり

竿とりて行舟はやき滝津浪

明離れたるむらの中川

そよぎ立竹や烟をはらふらん

霜ふむとりのねくらさる声

ウ分出し野は冴さゆる朝ほらけ

咲ぬと冬もとむる梅かゝ

かせわたる太谷のおくは香にて

〔以下省略〕

祖白 12

吉深 10

昌隱 10

正的 10

昌勃 10

宗治 9

能碩 9

随珍 9

由純 8

昌程 12

伝才 1

△作品（中）二▽

小松天満宮・北畠宮司家所蔵、写本

『快全・能順等百韻連歌集』による。

〔延宝三年四月二十日〕

「江守値孝身まかり給ふ時 独吟ニ」

〔聯玉集』369 詞書〕

江守是屑追善独吟

知人のもなきや忍音子規

能順

短き夜半の夢の暁

月宿る仮寐の袖は露に濡て

山路の秋の風の寒けさ

陰行は落る木葉の色くくに

苔地の片辺水そ流るゝ

岩伝ひかゝれる橋は幽にて

里一村の遠き河上

ウ呉竹の烟仄めく夕日影

しはし霽の酒ぬる跡

絶す猶すさふ嵐の音はして

行衛も同し空の浮雲

明日は又越なん峰と詠やり

花故旅に春送る道

若草をあかぬ枕に引結び

夜も長閑なる春日野の月

音聞は佐保の川波更渡

哀千鳥の妻問てなく

あはてしも悲しき里の帰るさに

しほる袂も人は思はし

数ならぬ身の歎こそはかなけれ

いつも恵を頼む世間

ニ 邪のなさを知らし神慮

つらねざらめや大和言の葉

豊なる大宮人の交りに

今日の物見は殊更の庭

桜花又白雪と打散て

帰る山辺の夕昏の春

狩残す片岡遠み鳴雉子

霞の中の道は知れず

曙に誰か先達旅の空

目覚せとてや鐘響らん

手枕にかたらひ顔の月澄て

独悲しむいにしへの秋

住まゝに里は露けき浅茅原

問もやすると待そくるしき

ニッ 他人の契りも思ひ捨兼て

恨ても又いひよれる中

難面も頼れぬへく成けらし

世をしらしやおよすけし袖

政あつかる道の学ひして

民を憐む心深しも

寒さをや夜のおましに覚ゆらん

簾も白く月そ傾ふく

露は霜に移る砌の閑にて

残れる虫の声幽か也

認来れは起て鶉の跡もなし

小笹むら／＼打靡く陰

花落る太山の水の音さひて

霞の底に遠き谷川

三 消果ていつこの余波雪の色

野はかけるふのもゆる末／＼

鳥声聞ならしつゝ行道に

夜は仄にも明る閑の戸

杉村の梢に雲の棚引て

時雨をのこす嵐吹らし

雄鹿鳴山陰くらき夕月に

更て嵯峨野の秋の淋しき

萩薄乱れて色も一盛

籬の露の消行は惜

立涼む庭に朝日の早指て

近き外面の空蟬の声

檜葉の片枝も繁き下陰に

いつ木綿かつらかゝる神山

三ッ 君か代やさそな久しく祈るらん

老の末ともなれる法師

御仏の迎計を思ひにて

寺は心のすむ所なる

松風を聞添つゝも見月に

来ぬ人故の長き夜な／＼

憂泪払ひ侘てもうつ衣

うかれ果ぬは哀れ古郷

流石にも親の掟や思ふらん

ともに位をゆつる恠しさ

絶ぬこそ其名もしるき家の道

笛の調は猶きかままし

立よれよ雲の上人花の本

かさしに折らん藤も咲けり

名 閑なる多枯の浦浪霞む日に

富士の高根は朝明の空

咲暮す昨日の風や雪ならん

問帰りぬる跡の松の戸

うさそ添云さらましを身の昔

留めかねたる泪はつかし

わりなくは恨しと思ふ別路に

さのみ心の何若ひぬる（マヤ）

くり返し猶はたうたふ酔の内

明るもしらぬ月の伴ひ

木隠に紅葉蕨を敷馴て

残りすくなき秋おしむ山

冷しく曇かちにも打時雨

消しかたみや夕なるらん

名 問来れは野は深草の物淋し

冬逢渡る木枯の風

白雲の入日を薄みたゝよひて

水遠き江のかたはらの山

等閑に雁な帰りそ花の時

また春雨に明ぬ半天

三月唯今夜一夜を頼にて

小弓も哥も世は夢の程

横山左衛門忠次（如心）追悼作品

—『白山万句』所収（参考作品一九〇）（一）（四）

p. 506 ~ 516 参照 —

△△作品（中）三—一▽

天理図書館本
翻刻第四一〇号

天理図書館所蔵、写本『連歌集宗養等

百韻外』△れ4.2—30▽による。

手向にもとおもひ侍るものなり。

于時延宝八年六月上辭

夕立は袖にわき出る泉哉

むかへん夏の月をまつ庭

我宿に花見し春を送り来て

聞なれぬるは軒のうくひす

閑なり霞む外山の朝な／＼

尾上の雪も隙やそふらん

旅人のたとりこそゆけ岩根道

水やを_レ求て駒やかはまし

秋_レ来てもはつかり衣暑日に

また月出ぬ野への杳けさ

八重降て霧や隔る鐘の音

暮ぬる山の寺は淋しき

摘置し櫛や友と焼ぬらし

戒あれはとらぬさかつき

籠れるは親のおもひの日数にて

如心

昌陸

昌純

城弥

吞了

昌敦

栄出

周旋

昌程

執筆

陸

心

弥

純

敦

涙の色もうき朱の袖

すゝむにも短き位歎くらし

よみ伝へたる大和言のは

葛楓茂りを分る細道に

入もて行は涼し谷合

川上は下津瀬よりも音添て

水やひたゝく長雨の空

二 国土となりし始をおもひやり

うちなかめぬる淡路島山

住吉の里を朝氣に立出て

いかに置らしかた削の霜

夜や寒き松風落る注連の内

更て庭火の消つくす跡

百敷も忍ふあたりはしめやかに

おもひうかれて響く琴の音

今来むと下待にける夕つ方

よそにこひんの文は恨めし

雨雲や背子か栖もかくすらん

了

旋

出

心

程

純

陸

了

弥

出

敦

程

旋

陸

心

弥

純

敦

月より後の枕さひしも

なからへはなれもよはるや虫の声

霜露をへて住る蓬生

「以上三六句、延宝七年夏興行。

以下六四句、昌陸独吟。」

ニッ 主なき砌もたえぬ秋の水

とへはあはれの深き宇治山

郭公難面妻に音を鳴て

五月雨近し物おもふころ

立花の薫る夜も憂丸臥に

見つるむかしの夢のはかなさ

書置や壁に残れる筆の跡

聖の道は仰ぬもなし

しるし得る類ひ数多の行ひに

やせおとろへし姿あやしも

心たゝ我にもあらぬ病して

みたるゝ酒の酔の度／＼

月花の折をたかへぬ交りに

了

旋

出

陸

夜さへ梅を愛はやすらし

三 長閑さにおろさぬ窓や北南

降も小雨の霞む江の村

夕かけの芦火の煙たへくくに

干侘ぬらし難波女の袖

植るてふ比は田面にいとまなみ

行も帰るも無な岡こえ

我庵に残れる年は只一夜

老のね覚の哀そふ床

さらたにもろき泪を秋の月

物なけけとや天つ雁かね

たらちねの隔つる中の身入て

いかにすへけん通路の関

皇の御代こそ譲る折ならめ

小田のさかひや畔のかたはら

三ッ 一本の古木の陰にさし柳

巢を出て猶遊ふ雛鳥

春風は鶴の毛衣吹すさひ

霞の洞やむへかすむらん

誰しかも惜みて月を水瀬山

夕の露に菊そうつろふ

定ぬは秋の胡蝶の舎にて

まつ虫のなく野こそ広けれ

別してかなしき道の程ならし

さそはて妹かなと渡川

我落す涙の滝は増る世に

猶うき事の絶ぬ山住

咲はとく散や待れし花の嶺

松のみさはは幾春の陰

名 霞ぬを池の心の水広み

哥にもきけと蛙なく声

舟人の棹取なかれ杳にて

淀野をゆけは曙の空

おもふこそ月の都の名残なれ

つかぬ旅ねの夢は冷し

萱刈ておほふ丸屋も洩霜に

軒はの萩はうら枯ぬめり

問来ぬにかことかけんもはかなしや

他し形見の帯は何そも

衣くの後の朝に帰る雁

ひとり春日をくらさんはうし

あたらしや人にしられぬ山桜

三輪の檜原はいかに木深き

名ッ 侘しらにましらなく也雪の中

なつめる馬はすゝみかねつゝ

勝負のまたかたつかぬ戦に

いたく心をいるか乱碁

夏なしと簾をまきの板庇

藪は若葉の花も色こき

忍へとや世に埋もれぬ名取草

情ありしか跡もとふ道

△作品（中）（三十一） 天理図書館本
翻刻第四一〇号

延宝八年六月十三日

横山氏忠次いにし年草庵にての会に「きかし

かし都ならずは時鳥」といふ上句を給れる後

程なく無成給ひしをおもひ出し

きかしかしきけはうき世の郭公

したふかひやは短夜の月

枕かる木の下風に花散て

分残したる道のわか草

村消の雪ふむ野への離駒

桙の里の朝日閑けし

門田行水や仄々けふるらん

竹の葉伝ひ霧なひくらん

ウ 色々の小鳥やわたる園の内

虫の鳴音のよはる明方

目覚せは月漸寒き小筵に

昌程

昌陸

昌純

昌敦

吞了

周旋

陸

程

敦

純

旋

かたしき衣搗しきるらし

橋姫や妻待侘る袖の波

逢せはいつの我思ひ河

書なかつ中の水茎度くくに

もろき泪は名をもくたさん

埋木の身は人しれす年古て

松を友とや住谷の菴

聞は只床の物なる猿の声

ねられぬまゝにうき岩枕

関守も都の夢路ゆるさなん

波の音のみすまのうら船

ニ 汐風やくもりもはらす一時雨

夕日のもるも寒き笹葺

軒の内に神鳥鳴よる小田の庵

垣ねの道は人かよふらし

かこつこそ他なる妹か心なれ

うはへの契あやなことのは

神かけて思かはすはたかはめや

了

程

陸

純

敦

了

旋

陸

程

敦

純

旋

了

程

陸

純

敦

了

かたは有ともよしやあはなん

小車をくたくはかりの前渡り

くれぬにかへる里の炭うり

苦しむはよるも専の宮仕

とのゑの月に嵐ふく也

山のはゝいかに見つらし秋の霜

空冷しきかさゝきの声

ニッ うら枯る洲崎の芦は波越て

傾く陰の淋し浜松

幽なる西日に干や海土衣

真柴ひろひてかへる室の戸

山合の葉なからに朽けらし

さけふましらや冬を侘らし

忍はるゝ雪の御幸の跡暮て

よしのゝ春や残す花の名

隠家のやぬしは露と消し世に

くまで氷やとけぬいさら井

道とをきあら田は去年のまゝならし

旋

陸

程

敦

純

旋

了

程

陸

純

敦

了

旋

陸

程

敦

純

旋

しけき蓬はひこはへし陰

月やとる浅茅か露の玉添て

更るひかりはいつか稲妻

三 □りにし名残身に入天津人

恋の烟やたくふ富士のね

清見瀉波の立るに物思ひ

泪もさそな啼村衛

霰ふる夕侘しき泊舟

木陰はわきて冴る松風

一夏を結ひてやよる石の床

悟得んとて蟬を聞山

ともしけつ螢はかなく明る夜に

軒端に白き月の薄霧

夕顔は何の花そと秋かけて

美豆野の薄誰まねくらん

あるし無淀の住めは物淋し

さし捨舟や岸のかたはら

三ッ 驚ねふる流の光沈むらし

了

程

陸

純

敦

了

旋

陸

程

敦

純

旋

了

程

陸

純

敦

了

波のまに／＼あそふ鱗

風も猶ひゝかす琴は唐めきて

舞のかさしの紅葉散場

欄をさやかにてらす入日影

牛もなやむやいと暑き比

草刈の休らぬ野路は杏にて

しとろもとろや分しかや原

けたものゝ岡へにかよふ月の暮

外面もあるゝ村の露けさ

八重霧を頼もしけなる籬にて

朝な／＼よふ池の友鶴

花またて汀の雁は帰るらし

春雨過し真砂地の末

名 催すは雲井の庭の賭弓に

国の司をゆつりぬる人

賢くもをふしたてたる心にて

おこりならばゝ学ひをもせし

法を聞為とやきぬる墨衣

旋

陸

程

敦

純

旋

了

程

陸

純

敦

了

旋

陸

程

敦

純

旋

やつれいとはて薪こる袖	了	問よらん舎りもあらず暮日に	旋
ふる雪やいそく小家の冬籠	程	あふてふことはいかに占方	了
難波田舎と嵐烈しも	陸	よな／＼の夢の倂あやしみて	程
心あらはおしまん梅の紅葉にて	純	出しや花にあかぬ玉しる	陸
起出る野の月の明仄	敦	うたふ詩は三月のとちか歎らし	旋
重れる霜にひえけり寺の前	了	今はとなきを送る春の野	景允
男鹿もこえぬ岨の梯	旋		
秋されは賤か山畑守るらし	陸	昌程 十七	吞了 十六
こはるれは又かこふ笹の屋 <small>(カ)</small>	程	昌陸 十七	周旋 十六
みそれをや払ひ侘たる旅衣 <small>名ウ</small>	敦	昌純 十七	景允 一
たとる木曾路の遠き行末	純	昌敦 十六	

能順・北野宮仕仲間との修鍊抄

——能順伝資料・その四・宗因点『延宝五年仲秋 北野三吟連歌』参照——

〔近世文芸 資料と考証〕10号所収）

△作品(中)四▽

大阪大学文学部国文研究室所蔵・含翠堂(土橋)
文庫本、『連歌集』『A H 8・19』の(1)のうち

延宝八庚申年三月

「年経て都にのほり 旧友にあひて」

〔聯玉集〕266 詞書

遅桜うれしき春の名残哉

能順

帰らてそ啼庭のうくひす

能通

霞む野を笹の内の雪消て

随珠

明る朝氣の風しつか也

順

さゝ波に行舟みゆる浦伝ひ

通

泉良の栖はいつこなるらし

珠

暮る夜の芦火も月も幽にて

通

時雨冷し遠の山もと

珠

ウ
みたれ散紅葉や分る鹿の声

順

いつしか秋も末になる比

通

風寒み古郷思ふ旅の袖

珠

かり寝は夢を結ふともなし

順

待侘ぬとはすはいかて明さまし

通

うきに堪しの哀とをしれ

通

人も身も恨果ぬる世中に

珠

跡絶ぬへしふかき奥山

順

惜むこそたゝ一もとの花の陰

通

我菴にみる梅をな_レ手折そ

珠

邂逅に問もやすらん春の友

順

雨のうちには啼ほとゝきす

通

月すめは悲しき猿の声聞て

珠

峰のあらしに夜こそ長けれ

通

二
隠家のね覚は秋の物なれや

珠

露のやとりとなる苔の袖

順

忘草摘ぬるかひもなき跡に

通

絶し人ゆへ立名物うき

珠

相思ふ中にこそ身も惜からね

順

遠きさかひもともに行かはや

順

飛鳥はいつくとまりの山桜

通

春より後の峰のしら雲

珠

更にまた去年の嵐や帰る覧

入江にはるかにひたす夕浪

影うかふ汀の月のほのかにて

薄霧なひきそよく芦原

秋もはや置霜寒き朝朗

門田の雁の友したふ声

ニッ 山里に侘とも人やしらざらん

おもはずも身のかゝる長命

こゝろ只とむへきゆへもあらぬ世に

哀の添やすくせなるらん

二道も頼む方にや定めまし

真ならぬこそうたかはれぬれ

聞法や心さしにも寄ぬらん

仏のちからたゝねかひてよ

身に重き罪はのかれぬん物ならて

筑紫の海の月や見果む

まとろまで秋の夜すから行舟に

千鳥数啼霧の遠方

順

通

珎

順

通

珎

順

通

珎

順

通

珎

順

通

珎

順

通

珎

深山木の梢のいつち花ならん

夕の空の鐘は長閑し

三 したふかひ有て加る春の日に

をくらされても野路の伴ひ

誰とてもか他し烟にもれなまし

恋には胸のをくるしむとしれ

いへはえにいほぬを浅くなすもうし

空おほれする人のつれなき

筋もなき事ならましや我恨

出ていにしともしきをそおふ

頼ぬるゆかりも思ひ捨る世に

いつ迄か身を侘てをくらん

春秋を哀と見るもこゝろにて

雪の上なる月はあやしき

陰に散花をは風も払ふなよ

人もこそ来れ藤の黄昏

三ッ 霞をも忍る里のたよりにて

思ふにあはゝ雨もいとほし

順

通

珎

順

通

珎

順

通

珎

順

通

珎

順

通

珎

順

通

珎

果しらす袖のみぬれて憂泪
 身はうき舟のなかれてそゆく
 今は只よるへなき迄衰て
 あてはかなるや猶こゝろはへ
 姿さへたゝにはあらぬやはある和歌
 けふはかりとそ出る御狩場
 萩薄秋の盛や思ふらむ
 嗟峨のゝ露にむしもこそなけ
 ふり行を月に憐む塚の本
 いかに見えつる旅人の夢
 憂契空おそろしく歎く夜に
 ふたかる方もいみかねてとふ
 頼まれぬあすの心を思ひ侘ひ
 名
 さそふにつるゝ身はあちきなし
 貞にはまた誰としもいさしらて
 面きらひこそいはけなきさま
 むなしきを忍ぶ涙のとゝまらす
 秋も過來てまた年のくれ

順 帰らぬを待そくるしき遠津人
 通 住やうかれん荒増るさと
 珎 此比の野分にしほる袖もうし
 順 露をかたみの花の草く
 通 七夕をまつる砌の跡さひて
 珎 月は入つゝ宵過る空
 順 あかて只しはしと思ふかたらひに
 通 帳の奥まる人はつらしも
 珎 名
 け近くは馴しとするや恥ぬらん
 順 さすか情を見する玉章
 通 忘るやとおもほゆる迄間絶て
 珎 共に住んと契りつるやま
 順 春は花冬の詠は雪の時
 通 光をいはゝ明ほのゝ月
 珎 身にしめて尚声そへよ神々楽
 午丸 千世もと祈る我君の□□
 通 「句上、編者補」
 珎 能順 三十二 随珠 三十三

△作品(中)五▽

大阪大学文学部国文研究室所蔵・含翠堂(土橋)
文庫本、『連歌集』△H8・19▽の(1)のうち

朝夕にうつるこゝろや花盛

能通

窓のむかひに霞む山の端

随珎

春の雪たゝ一村を余波にて

能順

下萌渡る野は緑なり

通

行水や末遙(カ)にも澄ぬらん

珎

音も更ぬる川風の月

順

友よふや夜寒の空に啼衛

通

旅寝に秋の霜払ふ袖

珎

ウ 笹の葉の深き山路に日はくれて

順

梢は雲のまよふ松かけ

通

柴の戸はいかに閑けき住所

珎

塵を離るゝこゝろゆかしも

順

身を替て仏の国に生るらん

拙きも尚法はたのまん

灯のひとつの影も闇からて

稀に逢夜は面はゆき中

情をもしらすと人やかこつらんし

おもひとゝむな世もかりの菴

貧しきは侘るにつけてうからまし

いやしき業をならひやはする

月に袖秋の夕部はしほたれて

雁かね聞は都こひしき

ニ 山風も漸身にしみて吹空に

野は深草の色かわり行

里とへは砧音して物寂し

末もつゝかぬ道かすかなり

白雪の分るまに／＼降添て

摘にも袖の若菜すくなき

家つとにいさかさしてん梅の花

来ぬ人おもふ春の山踏

通

珎

順

通

珎

順

通

珎

順

通

珎

順

通

珎

通

通

珎

順

古寺の霞む夕は静にて

鐘折くゝに打ならす音

久しくも寢覚おほゆる小夜枕

月はかりこそ身にそへる友

何事も秋となしつゝ捨し世に

露なかくりそ墨染の袖

ニッ
ひろひ行爪木の道は寒からし

奥尚ふかきすさふ谷の朝かせ

村くゝに山立のほる雲浮て

里や有らし松高きかけ

夕波に舟さしよする江を遠み

沖津塩路そかきくもりぬる

半空に鶴の翅の跡きえて

しはしひかりののこる遠かた

暮て行秋の形見や月ならん

閨の板間の霜やは冷し

きりくゝす声哀なる暁に

思へはよわる老か身そうき

通

珎

順

通

珎

順

通

珎

順

通

珎

順

通

珎

順

通

珎

通

花ちりぬ頼むは遠し後の春

なと音信ぬ藤の誰彼

三
夏近き空としもしれ時鳥

草の菴に雨そくくなり

いつはあれと尚さひしきは夕間暮

帰らて語れまれに来し友

悔しきは尽せぬ物を身のむかし

うきを二度何頼まゝし

実ならぬ使ゆくこそ立名なれ

またかりにても我や逢みし

徒にやみねといふは難面なしや

恋に命もおしからんやは

身の程のかへりみすれは数ならて

人にゆつるもあはれみとりこ

麻衾かくつも寒き床の月

霰降夜や更増るらむ

三ッ
打乱れうたふ神楽の声澄て

手向の幣に落る松かせ

順

珎

通

順

珎

通

順

珎

通

順

珎

通

順

珎

通

順

珎

通

紅葉も秋も限の立田やま

いつくなるらん男鹿啼暮

露時雨分て行野は物怪し

有にまかする霧の下道

残れるを月に折とる萩か花

とひ来て主を忍ふ古跡

中絶し程を思へは憂契

つな引にけるこゝろはかなや

とめ兼て浪になかるゝ海士小舟

早き瀬なれや行湊川

暮て尚音そふ花の山下風

春の別を鐘や告らん

名 酒酌て長閑なりぬるける伴ひに

言の葉尽せしたふ古事

いふかしく思はるゝこそ人の上

かゝる憂身はさもあらはあれ

恋すてふそしりおふともいかゝせん

心をかはせ年若きほと

順

珎

通

順

珎

通

順

珎

通

順

珎

通

順

珎

通

順

珎

通

才有にしたかひてこそ道もうれ

もとめさらめや君か後見

世中の事うつりつゝ定まらて

春を思へはまた秋のいろ

薄霧に夕詠する水無瀬山

ひやゝかなれや滝浪の音

影清き月は木の間の松の風

おかみするより宮居たうとき

名 跡垂し神代やさそな遠からん

御所生の野へはものさひにけり

草／＼の茂りいつしか冬かれて

床に臥猪や霜を侘らん

人すまぬ菴は荒たる山隠

道そことなき岡越のすへ

しのひとめかねぬいつくの花の匂らん

風もかすみにゆるき明ほの

〔句上、編者補〕

能通 三十五

能順 三十一

順

珎

通

順

珎

通

順

珎

通

順

珎

通

順

珎

通

午丸

随珠 三十三 午丸 一

△作品（中）六▽

大阪大学文学部国文研究室所蔵・含翠堂（土橋）
文庫本、『連歌集』△H8・19▽の(1)のうち

したはるゝ春のとまりはこゝろ哉

随珠

馴こし花をおもかけのやま

能順

白雲に有明の月や霞むらん

能通

啼ほとゝきすほのかなる空

珎

急雨の降行里の遠方に

順

くれぬといそく道の旅人

珎

声くゝに間なくもよはふ渡し舟

珎

幾瀬の波のたちさはくらん

順

ウ 川かせに木葉むらゝ散乱れ

通

茅原かすゑの入日寒けし

珎

片山の陰野を見れば霜置て

〔無記〕

ねもかれくゝに松虫の啼

通

小夜ふかき秋のね覚は物悲し
隠れよ月も思ひそふ床
もしやとも雨には待む人ならて

雲井隔つる中のはかなさ

忘るなよとは契りしも徒に

忍ひつる名をなともらしけん

沈む身の世に在物と知もうし

罪にまよはぬ玉としもなれ

御仏の姿ならずや墨の袖

うらやましくも住る室の戸

ニ 静けさやこゝろにも似ぬ空の月

はらひ侘ぬる別路のつゆ

君を置思ひ身にしむ古郷に

恋しき文の便過すな

折袖の匂ひとも見ん花の枝

色もことなる梅の怪しさ

いつはあれと薄雪かすむ曙に

聞そめはやなうくひすの声

〔無記〕

通

珎

順

通

珎

順

通

珎

順

通

老か身も春を待こそ頼なれ

哀は草の冬かれの菴

寂しきや事問嵐夕時雨

妻とふ鹿のひとりなく山

いつしかに紅葉も秋も跡絶て

盛久しき園のしら菊

ニッ 冷しき朝氣の月は霜の上

やとりを出て野にかゝる道

末しらて心細きは旅ならし

亦逢(あ)んとはちぎり置友

酌捨る名残有へき盃に

狩場にけふは暮らし果まし

邂逅にさそわれ来る山桜

檜はら吹こす遠の春かせ

永日もかたふく影や曇るらし

消つゝ跡も見えぬかけろふ

世の中は昨日の人の忍はれて

面かはりする白髪はうし

珎

順

通

珎

順

通

珎

順

通

珎

〔無記〕

いかばかり心に物を思ふらん

歎のみこそ筆にかゝるれ

三をのつから口ふたかれる独居に

なすわさもなく眠る折く

暑き日は暮しかたくも苦しみて

あなかましきる蟬の声く

山里の外面の梢夏ふかみ

檜の戦きに秋そ覚ゆる

分ならず交野の露に袖沾て

朝霧まよふ淀の川つら

指舟は月のいつくに音すらん

哀一ふしうたふたわれめ

かり初の契りなからも打解て

たのむけしきはいとも物憂

世に逢をへつらはぬ社心なれ

道なき時そ下にうらむる

三ッ 亀山の物閑なる陰しめて

さそなみとりの洞のたのしみ

〔無記〕

順

通

珎

順

通

珎

順

通

珎

順

通

珎

順

通

珎

順

通

合つゝもて遊びぬる和歌

長き菖蒲の根こそしらるれ

五月雨は浮藻なかるゝ沼水に

末かけつゝもあら小田のはら

都には立(たて)もあらぬ布留の里

侘ぬる身にも年は越けり

此春も花待かほの我命

馴し砌と蝶も来ぬらし

露しけみむしの声する古跡に

誰なかめよと月澄るくれ

秋風のすゝ吹渡る山のおく

岩かね枕夢たにもなし

名 千鳥啼磯寝侘しき晝に

うしほを浪のよる清見潟

緑なる松原涼し三種か崎

夕日ほのかに雨はれぬめり

霞さへともさひしき軒の露

春も春かはあれし笹の屋

通 順 珍 通 順 珍 通 順 珍 通 順 珍 通 順 珍 通 順 珍 通 順 珍

鋤かへす跡たにもなき小山田に

深くなりたる道の草々

鶉臥野を遙(か)にもたとり来て

秋かせ侘し片敷の袖

今夜もやあはて明さん月の下

うさのみ見ゆる夢そかひなき

亦帰るためしもしらぬ別にて

千世もいつきの宮のことぶき

名 木高さの猶も添へき松の陰

雲なかくしそ初雪の山

明果る程待空のしのゝめに

駒の音する関の戸の道

水清く落行岩のかたつ方

苔のむしろにおり居そよぎ

いささらは爰にくらさん花の陰

かすみの酔をすゝめぬる宿

通 順 珍 午 通 順 珍 通 順 珍 通 順 珍 通 順 珍 通 順 珍

△作品(中)七▽

大阪大学文学部国文研究室所蔵・含翠堂(土橋)
文庫本、『連歌集』△H 8・19▽の(1)のうち

花に月光をちらす木の間哉

能順

霞む山路の静なるくれ

能東

鳴鳥も春とよもにや帰るらむ

能拝

園生いつしか茂りぬる陰

随珎

裁つれば竹の籬と成けらし

東

小野のかたへの一むらの里

順

濡て来し時雨干はや旅衣

珎

かたふきながら残る日の影

拝

ウ 顧る山は雲間にあらわれて

順

嵐よをくれ峰の紅葉ゝ

東

幽にておほつかなしや鹿の声

拝

目覚す月は入かたの空

珎

堪てやは雨も涙も秋の床

東

尚とひかたみ葎はふ宿

順

したはるゝ昔は遠く身は老て

珎

末いかならんかわる世中

拝

事にふれうつる心は果もなし

順

歌のなかめをおもふあやしき

東

白雲にまかふよしのゝ桜花

拝

滝のうへより明ほのゝ春

珎

雪消の水に筏や急くらん

東

岩越て行波のすへへ

順

ニ夕附日嵐の遠に影晴て

珎

寝ぬや鴉のひとり飛空

拝

市人の立別たる跡さひし

順

ひち笠雨の降しきる音

東

たゝきよる門はこたへもあえぬまに

拝

いとひかほなる気色ねたしも

珎

今迄に裏表もなく契り来て

東

なをさりことは何かうらみん

順

思ひやれこゝろにあまる我歎

珎

世のうきに社語る身のう

拝

やつしたるゆへははつかし昔衣

順

照らし見るらしねかふ御仏

法の師の暁月におこなひて

露けさ馴る室の哀さ

ニッ 稀に来てみ山の奥は秋深み

木葉うち散り松風そ吹

侘しきは我住菴の夕にて

とよめてしかな立帰る友

争もまけてややまん囲碁の□

眠りもよほす灯のかけ

鐘の音聞そふる夜や更ぬらん

さりともとのみ待そはかなし

うつりぬる人の心もまたしらて

恋にならひぬ秋のかなしみ

おもひなき袖には露も置さらし

さそなうかれて月をみるくれ

簾の内の匂ひもそはん花盛

住よそほひも藤つほの春

三 長閑にも聞ゆる琴の調にて

東

拝

珍

東

順

珍

拝

順

東

拝

珍

東

順

珍

拝

東

順

拝

酒をたのしむ人のましはり

命には何しかめやと思ふらし

逢せ絶しと契りをく中

つらきをも尚今しはし待てみん

無名きよむる折もこそあれ

祈るてふ神の恵の深き世に

松のよはひを君そあへまし

豊なるはこやの山の陰しめて

さま殊さらにつる釣殿

涼しさも月も心の池の水

こほれすもあれ蓮葉の露

蛸の秋またて吹夕かせに

柴の戸さしはものそさひしき

三ッ 侘る此身はいにしへの春ならず

霞を見ても消を社思へ

そのまゝに袖の水の年越て

別し日よりやまぬ恋しき

古郷は遠くなる社悲しけれ

珍

順

東

珍

拝

東

順

拝

珍

順

東

珍

拝

東

順

拝

珍

順

たとる野山の末のかりふし

草枕幾夜か月を頼むらん

雁か音さへに秋寒きそら

色かはる鳥羽田の面の朝朗

吹むすふらし風の下露

あれにける里の哀はいかはかり

花のあるしもたゝ夢の春

客人のけふの三月や惜むらん

小弓あそひはまれのたはふれ

名心たゝつゝしみ馴る学ひして

おそるへきこそ猶天の道

鳴神にしはし休らへ中宿り

雲立まよひ明のこるやま

時鳥たゝ一声に跡たえて

うつゝとなれる夢のみしかさ

憂人を思ふ昼ねの手枕に

今朝の別のなみたひぬ袖

黒髪の乱れし末もつくるはて

東

珍

拝

東

順

拝

珍

順

東

珍

拝

東

順

拝

珍

順

東

珍

まめくしきを心とやする

あつめぬる文の教の品くくに

親にまされとおふし立らし

都には帰らて月の明石瀉

夢路冷し浦風の音

名海土衣うつや夜深き空ならん

芦火かすかになれる露霜

秋暮る難波渡りの里さひて

あらし果たる小田のかたく

狩場とて千人の分し山の陰

雪のうへにもみちは有けり

花にのみ問は心の深からて

猶もしたしめ春の伴ひ

〔句上、編者補〕

能順 二十五

能東 二十五

能拝 二十五

随珍 二十五

拝

東

順

拝

珍

順

東

珍

拝

東

順

拝

珍

△作品（中）八▽

大阪大学文学部国文研究室所蔵・含翠堂（土橋）
文庫本、『連歌集』△H8・19▽の(1)のうち

花に影月に色ある夕かな

能東

雨の名残の露霞む庭

能順

きのふまで垣根に見えし雪消て

随珎

みとりもいま浅き草むら

能拝

せきなかつ水はかたへの小田の原

順

かた山本の道あらはなり

東

散つもる木葉を風の吹分て

拝

柴の戸さしはとふ人もなし

珎

ウ 秋深き寒さはいかに送るらん

東

露も時雨も猶旅のそて

順

荒果し宿に夜長き仮ねして

珎

月こそ残れいにしへの夢

拝

一声にかたらひあへぬほとゝぎす

順

花橘の陰のやすらひ

東

夕間暮涼しき風はふれあかて
折く浪のよする川つら

珎 拝

爰かしこ白きやさらす布ならん

東

残る入日かけそはれたる

順

みそれせし雲は見るく峰越て

珎

こ高き松やひゝき添らん

拝

古郷は寂しかれとて秋の暮

順

衣うち侘誰をまたまし

東

二 鳴雁の涙すゝめて更る夜に

拝

夢やはみへん萩の音つれ

珎

独寝の枕悲しき月の下

東

わかれし人も旅や思わん

順

終に行道ともならん首途して

珎

今はとて世を捨るあはれさ

拝

手を折は経にけるとしの数くくに

順

つくくとしも歎く左迂

東

終夜あらし浪風聞侘て

拝

茨そへまほし筈の屋の内

珎

麻絹を冬のまうけはおろそかに
程につけてや春を待らん

埋木の朽行身こそはかなけれ

誰かとはん浅茅生の陰

ニッ
露にかく沾て忍ぶを思へたゝ

月なき空にまとふ別路

吹からに涙猶そふ秋の風

虫の音にさへ物おもふくれ

里はたゝ古果るまで人待て

まきるゝ事もあらぬつれく

つゝむとも老の思ひや顕れん

よわりもて行玉の緒はうし

身におはぬ道に望をかけて来て

昇るたよりもいさ位山

時をしもうしない果し君か代に

をのれのみ澄心あやしも

花にたにとふ袖いとふ室の内

昔の衣にやつれにし春

東 三 去年までは仕来ぬるや思ふらん

順 めしにも遠きあかたにそ住

珎 聞えなき其名はおしき学ひにて

拝 末に成世の和言の葉

順 照日にはいかて洒かむ天津空

珎 泉結ひていさくらさまし

東 □深き陰いさきよき昔筵

順 風もさわくなまくらかる山

拝 夢にもと都を忍ふ月の夜に

東 妹か形見は袖のうは露

珎 身にしめる勿ひも清し馴衣

拝 思へはうすぎ情なりけり

東 木とけぬ契はかなく頼来て

順 庵りくたしぬ有増の山

三ッ
東 引捨し谷の柚木はそのまゝに

順 岩間の雪の跡たにもなき

拝 花の後小笹戦めく陰寂し

東 鳥の音絶て打霞む暮

珎

順

珎

東

順

拝

東

珎

拝

順

珎

東

順

拝

東

珎

拝

東

狩衣春のすそ野や帰るらん

また醒やらぬ酔はしるしも

古事をかたれば語るましわりに

うらみ歎きの誰身にかなき

あやにくやに逢夜はまたき鐘鳴て

いかゝはせまし解かたき中

慰めん思ひならねはむすほゝれ

かゝる涙のうきみたれ髪

をとろへぬ月もむかはし朝鏡

身にいとわるゝ風は冷し

名 白菊の露もさなから折取て

こゝろはへこそ哥に見えぬれ

ゆるされぬ司や下に恨むらん

年は四十にあまりぬる人

愚にてまとふはあやな文の道

掟からこそ国もおさまれ

思え猶天の御神のその恵

いたらぬくまもあらぬ日の色

順

珎

東

順

珎

東

珎

珎

順

珎

東

順

珎

東

珎

珎

順

珎

誰筆のうつし絵鳥そ春霞

雁の別るゝ須磨の明ほの

長閑なる波の上行舟みへて

木の間晴たる松のむら立

明果る月に時雨や過ぬらん

あらしの末の雪はめつらし

名 浮雲に気色かわれる富士の嵩

夕に成ぬ遠き箱根路

いつくより照射の袖の出つらん

中にしむるか夏草の菴

外に見ゆる垣ほの梢花過て

そことしられぬ鶯の声

立こむる霞の野への朝朗

山もゆたかに風たゆむ春

「句上、編者補」

能東 二十五

能順 二十五

随珎 二十四

東

順

珎

東

珎

珎

順

珎

東

珎

順

東

珎

珎

能掎 二十五

能順 二十五

随珎 一

「無記」

「無記」

△作品(中)九▽

大阪大学文学部国文研究室所蔵・含翠堂
(土橋) 文庫本△H2・5▽による。

(表紙)

三上令直

三六番前句附連哥合

正「延々」宝九年

三六番前句附連哥合

一番

左 春かすむ梢のみゆる明ほの

春といへは先面影の花咲て

今日といへは花の面影立春に

山里は雪の内より春立て

春は先花を心の初夢に

梅か香の薄雪寒き年立て

音羽山去年の雪けの雲晴て

うす雪も梅の匂ひに春立て

右 只なをさりに春な思ひそ

岩戸より出しも同じ日の始

岩戸明し其神の代の朝霞

待くて今朝こそ見つれ宿の梅

草も木も恵閑けき世に逢て

今日こそは花見る年の始なれ

年立て長閑にそなる人こゝろ

花に又あわんと頼む年越て

二番

左 軒端は月も霞むとそみる

春寒^(か)き浦の塩屋の夕烟

さく梅の匂ひや空に満ぬらん

梅か香の空に満ぬる朝戸出に

梅か香の袖に満ぬる心ちして

定をく梅かほる夜の明ほのに

梅咲て雪気の風もかほる夜に

梅かほる夜半の嵐のは寒からて

右 隴月夜はさたかにもなし

雪をとめて折はやおらん梅の花

順

右

通

珎

「拜」

東

二

順

順

右

通

珎

「拜」

二

東

順

順

順

匂ひこそ折寄梅のしるへなれ
明かたの鐘こそ名残春の夢

難波かた春の塩路の詠して

規子夢かうつゝか春の空

ましてはし明ぬ雲井に帰る雁

雁の音いつこなるらん春の空

三番

左 太山隠れの春の寂しき

花盛むなしき夕鳥鳴て

雪間より朽木のかたへ梅咲て

たれならん独花見る柴の庵

尋来て花に鐘聞夕間暮

松の戸の雫霞める雨落て

我庵に暫詠る花散て

松の戸の雪間の雫音添て

右 霞こめたる木々の村立

春雨や青葉に花に洒くらん

巻向の檜原杉はら花咲て

右 そことなき花の香とむる山道に

通 いつこそと花の香とむる曙に

珎 雪解て山水遠く明る夜に

□ 匂ひ来るかたや花咲山ならん

東 四番

二 左 吹渡る枕の上の松の風

月も澄夜の花しら雪

花散山の寝覚露けし

順 花の香くらき峰の旅ふし

右 ちるやと花を思ひねはうし

通 花散跡のかり臥の山

珎 ぬる夜寂しき花の故郷

東 右 鐘ひゝく有明かたの山遠み

二 豊等の花は跡のしら雪クモ

嵐の夢に花の香そする

右 かり寝起出花にいそかん

通 豊等の寺や霞こめけん

右 雲こそ名残春の夜の夢

通

珎

東

東

順

順

通

右

右

珎

珎

東

東

順

右

通

珎

珎

散や別るゝ花のしら雲

尋ぬる寺の道そかすめる

五 暁 春

左 こほれてはまた春草の露

ぬる蝶も花の名残の木の本に

春雨にぬるるも詠さくら花

春は今こてふのみつく夢の程

花は只空しき枝の夕風に

うつり行春やこてふの夢ならん

春はまた残るこてふやあそふらん

枝たはむ八重山吹の垣ね道

右 おもふに春そ残りすくなき

よしや雨ぬれつゝそ見ん藤の陰

桜花藤山吹にうつろひて

老か身も又見ん花と頼む世に

散花に我世の末を驚きて

我世をは散行花の上に見て

いかなれはまた咲初ぬ遅さくら

東

花はねに鳥もいつしか帰らん

二

六 首 夏

左 木の間も稀にしけり立陰

夏かへる藤の匂ひに露落て

夏山や花の名残をたつね入

古郷の花の跡とへほとゝきす

尋ねすはしらし夏咲藤の花

一花の夏に桜は猶あやし

夏まてはもいつくの藤の匂ふらん

おほつかな卯花山の夕月夜

二

右 夏の野草の高く成行

とふ螢露ふく風にさそはれて

五月雨に遠方人の道たえて

水隠にさくや小沢の若杜(ワカ)

いつしかにみあれ過つゝ神さひて

卯の花の垣ねともなく里はあれて

花咲は傾く賤かうつ木垣

東

時鳥尋ん山の道遠み

二

二

順

順

右

右

通

通

珎

珎

拜

拜

東

東

二

二

順

順

右

右

通

通

珎

珎

拜

拜

東

東

二

二

七

左 ほたるや夜のひかり成らん

いさりせぬあしやの里の五月雨に

雲井迄照射さしとる高間山

五月雨は陰の草のや折添て

今朝みれば鶉飼の舟の跡もなし

五月雨は雲重りて月もなし

五月雨の比は空行月もなし

月くらき声やの里の五月雨に

右 袖に涼しき風の折く

いつくより花橘の匂ふらん

橘にむかしの人の忍はれて

橘の近き匂ひにゆめ覚て

橘の軒もる月に匂ひ来て

橘の匂ひや我を尋ねらん

蛸の鳴音に近き秋知て

八

左 そことも分す山深き道

幽なるともしの影の木隠て

天彦に尋ねたるほととぎす

幽なる苔の下水音涼し

木隠に古き氷室の跡とめて

かけするや氷室守ぬる人ならん

時鳥雲に入あと尋ねわひ

右 流るゝ水の音かすかなり

人帰る御枝河原の小夜更て

茂り合て木の間も見えす谷深み

涼しさもむかしにかへれ滝の跡

苔莖敷て涼めは更る夜に

谷深み木の下陰に飛ふはたる

北うろにしむるも氷室も下解て

九 初秋

左 草葉のうへに結ふしら露

宮城野の夕も今や秋の風

秋風は生田の森に立初て

秋来ぬと目には見えねと虫鳴て

順

右

通

珎

東

二

右

通

珎

拜

東

二

通

順

右

通

右

通

稲妻のかよひ初ぬる影涼し

木の間もる月も涼しき秋立て

虫の音に籠りし秋の立て来て

右 はや吹立ぬ秋の初風

生田野の森の下草露おきて

宮城のを萩咲比の庭に見て

生田野や露の下草色めきて

一葉(カ)ちる後もや木々も思ふらし

またるなと雁に告やる伝もかな

散や此春は馴たる柳陰

昨日見ぬ一葉散ぬる木の下に

十

左 夕の雲に雁の一行

月うかふ入江の水には山かけて

時雨やと山の端少色付て

真萩咲野への遠山色付て

山の端の詠淋しき秋の空

十一

左 天の戸渡る初雁の声

秋風にうつや砧をいそくらん

浮雲の浪立秋の風見えて

秋風の更行月に猶吹て

河原は秋の最中の月澄て

秋の夜の明るもしらす見る月に

更る夜の月は光の猶そひて

うす霧の月の行衛に棚引て

十二

右「左」 秋や心をさそふ夕昏

あちきなく恋そせらるゝ鹿の声

虫の音におもはぬ野への露分て

月見ればむかしにかへる我思ひ

吹初る萩の上風たゝならて

寂しさのうき身にしめは宿出て

虫の音にむくらの宿を立出ぬ

右 浅茅風吹「」来にけり

虫の音も乱れてをける夕露に

順

右

珎

珎

珎

珎

東

二

珎

順

右

通

珎

珎

珎

二

珎

順

夕露の古郷寒く虫鳴て

虫の音に聞もやそへん片鶉

露けさを侘て住ぬるふる里に

古郷は鶉なく野と荒添て

をきみたる夕の露に虫鳴て

露分る人しぬふる里に

十三

左 心只有もあらぬもうき秋に

夜寒の月は寝にそ見る

草木も人の袖のしら露

草木も露やなみたなるらん

いかなる風の身にはしむらん

（マヤ）
今月の月を雲なかくしそ

いかに難面山松のいろ

みれは草木も替り行色

右 なかむれは秋の心の果もなし

月にむかしを賤のをたまき

唐土までも月は澄らし

右 いかにも見たるゝ花のむさし野

通 老の泪に更す夜の月

寝覚の月におもふもろこし

揮 うす霧渡る夕くれの空

東 千種に思ふむさし野ゝ花

十四

左 独月見る秋風の空

更ぬれは四方の梢としつまりて

大方の露さへそはる老の秋

いにしへの夢は覚つゝ長夜に

露更る庭に木葉の音聞て

鹿の音のね覚ならはす山里に

なく雁の泪かしほる我袂

哀にも啼雁かねを伴ひて

右 秋の哀も只心から

袖ぬらせとてやは澄る空の月

露は袖にむかしもかゝる夕間暮

老ぬ身のかくやはしほる袖の露

通

珎

揮

東

二

順

右

通

珎

揮

東

二

順

右

通

むかし見し影やは替る袖の月

山里にすますはきかし鹿の声

むかしやは渡に曇る空の月

十五 初冬

左 夕／＼の片岡の霜

いつまてかならの枯葉の残るらん

枯果ん森の下葉の色もなし

冬は先森の嵐に立初て

いつしかに森の下葉の落初て

刈残す田面のをしね冬かけて

あらし吹冬田の稲葉一村に

吹しほる松風寒み里は荒て

右 汀の雪に雁の一声

月寒き入江の柳枯立て

冬枯の芦のかり寝の夢添て

ね覚する芦の丸やの夜を寒み

風寒る入江の芦へ小夜更て

冬枯の芦の葉渡る風呀て

東 珎 明残る月は芦へに影寒て

東 珎 くるゝ江の芦の枯はに風寒て

十六

左 陰ふむ柳冬枯のころ

道野への小草に霜の花咲て

霜に鳴田面の小鳥声寒み

道野への清水や結ふ薄水

道野へに結びし水や氷るらん

霜氷る川川へ(つじ)に鳥の打むれて

道野への清水か本はつらゝにゐて

寒けなる霜の白鷺哀にて

右 残るる月も手枕の霜

小男鹿の入野ゝ尾花冬かけて

秋や猶冬に入野ゝ花すゝき

音寒き杉まの風に夢覚て

夢覚る旅ねの床の夜を寒み

仮臥の夢驚かす鐘呀て

木の葉ちる陰にねし夜の夢覚て

東

二

順

通

珎

右

珎

珎

東

二

順

右

通

珎

珎

東

東

東

夢覚る閨の透間の風冴て

十七

左 さやかにも氷れる月は江をかけて

雪に雁鳴真野ゝ浜風

風さし渡るしかの浜松

雪はれわたる夕くれの山

千鳥鳴なり真野ゝ浦風

友よふ千鳥寒けなる声

洲崎の松に風寒る音

更る夜寒き磯の松風

右 冬枯のけしき寂しき野への末

春まつ梅の一本のかけ

草の戸さしも春や待らん

一木の松に風寒る音

尋ねいく田の森の夕霜

松に夕日の寒残るかけ

寒きなかれに残る日のかげ

たゝ一本の雪の松かへ

二

十八 初恋

左 いかなる時か打も忘ん

見し人をつらき思ひのはしめにて

それとなくみし面影の添もうし

うつゝにも夢にも人を恋侘て

ほの見しは身を尽すへき初にて

一め見し人の面影身に添て

見初ぬる面影ははや身に添て

ほのみつる人しも深く思ひ初

右 うきもいかなる契りなるらん

なひくへき人をは思ひ初もせて

あやにくに心つよきはしたわれて

難面を恋るみくりのねを深み

きみにより物思ふ身と生れ来て

いとへはそ猶あわれそふ新枕

きみみれはしらぬむかしの世もゆかし

我中はおひも見はて(マ)かよりきぬ

十九

二

順

右

通

珎

拜

東

二

順

通

右

珎

東

拜

無記

無記

無記

無記

左 くだく心は只さゝれ石

すころくの市はに人をこひ侘て

白浪の寄合事もかたし貝

忍ふれは打出難き思ひにて

玉をなす泪の滝の瀬を早み

忍ふれは泪の川もせき留て

うきに我泪の滝は玉ちりて

右 浅いこゝろは水もはつかし

思ひすと手洗の影に早見えて

山川のあた浪は世に立初て

替るとももらしはせしの我なみた

沈ぬるためしを思へ生田川

みせはやの泪は淵とならばなれ

恋せしと御秋川原に行もらし

山の井のあかぬ中こそ中ならめ

二十

左 身につらき心ならひはいかゝせん

よしやあたる人はうらみし

人にも人のつれなからはや

そむきは果し年へたる中

忘れ果すはよしや恨し

哀とたにも一言はいへ

逢見るたひに猶解ぬ人

契らぬ暮もあくかれて待

右 目のまへにはやむくひ有心ちして

うけへ言葉は聞もおそろし

憂人にうき人をこのまん

ふかくこふるもうしや人妻

恋の烟をなけく後の世

まことならざる誓ひおそろし

空ことゝなる誓ひおそろし

思はぬかことかけて悔しも

廿一

左 我心こそうはの空なれ

吹風の音に聞つゝ恋侘て

吹風の目に見ぬ人を恋侘て

右

通

弥

拜

東

二

二

右

通

弥

拜

東

東

東

東

左

順

右

〔無記〕

〔無記〕

恋初てまとふ夢路は夜な／＼に

うき人を雲のはたてに恋侘て

末しらぬ恋の烟を立初て

夕／＼雲のはたてに思ひして

右 うきたる心行方もなし

深からぬえにはくるしき捨小船

いかてかく踏まとひけん恋の道

憂恋は梶を絶ぬる舟なれや

つかねともあらぬ恋路乱にて

消やらぬ身は中空の雲なれや

廿二

左 なかめやらるゝ梢はるけき

君か里なこり惜くも別来て

きみかすむその里人も羨し

別来て猶こそ忍へ妹か里

きみかすむ宿をはかなく別来て

きみかすむ宿は霞もへたつなよ

かたらへよ思ふか里のほとゝぎす

珎

扨

東

二

右

通

扨

東

二

〔右〕 人なき庭は只松の風

閨の戸に音つれつるや夢ならん

とわるゝと見し夢明る真木の戸に

はかなくも夢は覚つゝ見る月に

廿三

〔左〕 たのめぬ暮になと待たるらん

なかめ出る月に思ひは慰まで

恋しきもいはゝ心のくせなれや

他人にこほすはおしき我泪

きかし只泪催す松の風

うかれつゝおさまらて憂我心

月みつゝ恋ると人の知るらめや

鯛のなく音にそへる我思ひ

右 たのめ置ても何にかはせん

うき中にさのみ命のかゝらめや

逢まては堪つきもあらぬ玉の緒に

思ふてふ人の心もしらぬ世に

玉の緒の堪ぬへくやは我思ひ

順

右

通

〔右

順

右

通

扨

東

二

順

右

東

二

順

右

珎

通

きみに又逢瀬はまたし我命
契りたゝ後の世迄は知かたみ

東 まとろまで夜長き床の独るに
二 廿五

廿四

左 かへすゝもしたふ別路

左 月も傾く雲の遠かた
別衣の空の名残に雁鳴て

順 忘るなと言言葉の外もなし
忘るなとわかれはせしの猶あかて
右 定無命を思ふ我中に
通 又もとは契り置身も明日しらて
二 又もとは契り置身も明日しらて

衣ゝにうらやむ雁のつらなりて
夢人はいつらかへりて鐘の声

右 そひ臥は夜の衣の夢なれや
形見そといゝてはしほるから衣
二 俤をさたかに見つる夢覚て

雁かねの泪をそふる夢覚て

東 右 思ふ心そ遠くつれゆく

思ひたへ寝なまし物を待うかれ
待侘る泪や空に時雨るらん

二 はてゝは四手の山路を契りにて
妹と背の中は二世を契りにて

鳴てうき雁かねもうき別路に

順 古郷の妹か俤身にそひて

右 袖とふ月の影もうらめし

右 きみかあたり詠る空に雁鳴て

独たに寝ぬへき内を秋風の

通 別つる人を忍ぶのうらみ侘

打もねて思ひまきれん秋の夜に

二 諸共に渡る習のみつせ川

さむしろの泪はつらき形見にて

東 俤に妹をわすれぬ旅の空

心なく夢吹覚す秋風に

二 〔無記〕

あわぬ夜は日比の泪又落て

二 〔無記〕

うき泪忍ひかねぬる床の上

二 〔無記〕

廿六 雑

左 みめくらしけり四方の山々

花に行春の心はあくかれて

白雲に花待ころの朝な／＼

霞より花の面影立初て

花さかり都の春に猶あかて

いづくにか又たくひ有富士の雪

打出て心を野への春の日に

さひしさに舍りを出し野への暮

右 閑に聞は水の音する

雪の中に春や来ぬらん谷の庵

雪うつむ谷の下庵春待て

谷の戸は春ともしらぬ雪の中

岩かねの床に夜長き寢覚して

雪深き谷の庵にも春は来て

山深き奥の岩間や漸ならん

いづくより夜舟寄来磯枕

廿七

左 虎臥山か風の烈しき

沖津浪竜のほるへくかき曇り

名のみ聞唐の原に遠く来ぬ

ねられめやしらぬ高根の旅枕

奥は猶竹の林の谷深み

くれ竹の世のうきふしは人心

木々に又竹の生そふ谷深み

雲水に行なやむ道の空暮て

右 雲と水とに竜や住らん

あやしさや祈にかなふ雨の空

長橋やかけて時雨るゝ勢田の海

閑けさや此世の外の谷の声

空に靡く旗手も浪に移ひて

川上の山風あらく雨落て

山は只鳥獣の床なれや

滝遠くそひつゝ山の峰続き

廿八

左 人はしらしの有増の末

順

右

通

珎

珎

東

二

順

右

通

珎

珎

東

二

心さへ深くめくらすはかりこと

万代を今日より神やかそふらん

尽ぬ世をの願を神に任せまし

身そ思ふね覺恥し空の月

思無身と見るらめと侘る世に

神に我祈るは此世のみならて

子といへは生れぬ先も哀にて

右 行衛をとほいかにこたえん

人しれす出んと思ふ世の中に

吹風に任する塵の世を出て

山にさへ有は果しと捨る身に

古郷を忍ひて出る旅の道

うくひすの舍れる梅をうつしかへ

世を背く心にしむる宿もなし

はし鷹の野守のかゝみ跡もなし

廿九

左 入江を遠み舟の行みゆ

難波かた萍たる浪の朝霧に

順

右

通

珎

珎

東

二

順

右

通

珎

珎

東

二

卅

左 老果る身をも心に慰めて

おもへは希の行幸にそあふ

西のむかへを頼む柴の戸

松原に海士の里く明初て

忍照や難波の浪の朝朗

影はれて入日のみかく玉つ鳥

うら浪に松風霞む朝朗

難波かた声の限なく夜は明て

更る夜の釣の灯哀にて

右 風を行衛の雲そ浮たる

仙人や身をし心に任すらん

夕日さす矢田の広野ゝ片時雨

沖津浪はるかに見えて島もなし

定なき身のはかなさを思へたゝ

人心定なき世を村しくれ

みれはその烟はたゝぬ富士の嵩

里までも時雨やすらん峰の庵

右

通

珎

珎

東

二

順

右

通

珎

珎

東

二

順

順

右

読哥こそは隠家の友

通

里有と行はたく火の影消て

「珎」

誰もうき世と独うらむな

珎

栖そと見しは狐の火かけにて

珎

親を憐む子そさすかなる

珎

越まとふ末はしら浪立田山

東

逢も契りと見る花の春

東

谷隠れたとりくてねらい狩

二

朽木の梅も春を待けん

二

右 心ほそしや柴の下道

順

右 いつも聞鐘にも此身驚かて

順

古郷の名残を捨て入る山に

順

花の散にそ惜む夕暮

順

逢人もあらてまとへる山深み

通

世をたゞ夢に明し暮しつ

右

うき世そと思ひは捨て入る山に

右

老のね覚に頼む行衛

通

あふ人もあらぬ山辺に行暮て

珎

心に遠き有増の山

珎

世を侘て思ひ入ぬる山ふかみみに

珎

月をうらむる老そはかなき

珎

逢人もあらぬ山辺の雪の日に

東

法にいらぬは月も恥し

東

水枯て筧朽たる苔の庵

二

思ふに老のね覚悲しき

二

卅二

卅一

左 えやは忘るゝいひし言葉

「」

右「左」物すこかれや夕暗の道

順

哀ともみぎや今はの其名残

順

いなひかり折く見えて降雨に

順

無跡をおもひ置つるおやくよろ

右

里ありと行は狐のともす火に

右

盡なるも知こそ親のいさめなれ

通

しらぬ野を行は神鳴雨落て

通

たらちねのいさめは後の情にて

珎

侘ぬれは人の憐み頼む世に
別れても面影さらぬ遠津人

無跡も賢き親のをしへにて

右 おり／＼ことに思ひ定す

世の中は只捨かたきものなれや

秋にのみ心よせしも花の春

捨ん身も頼みは尽し物ならし

いかにせん寢覚に侘る身の向後

捨ん身にほたし有こそ苦しけれ

春秋にうつるは同し我心

出し世に帰る心よいかならん

卅三

左 伊勢島や塩干のかたは杳にて

波路晴たる和哥の松原

一志の海士や磯なつむらん

うす霧かゝる若の松原

二見の浦の浪のよしなき

千鳥鳴夜の月そ更行

拝

夕日残れるわか松はら
二見の海士の貝ひろふみゆ

東

右

紅葉みたれてうかふ川浪

順

立田の川や色に成らん

右

立田の川そ紅葉なかるゝ

通

立田の川そ——
本紙ニ
如此

〔無記〕

またき紅葉のちらまくもおし

拜

いく村紅葉ちりみたるらん

東

ちるや立田の川の紅葉は

二

卅四

左 有をみるたに無心ちする

事たるもしらぬ物から閑にて

石の火にあやしいつくに籠るらん

いとゆふは手にもとられぬ物ならし

はゝ木ゝの陰分まとふ森の奥

露の世はたゝ稲妻のひかりにて

散残る花も風待けしきにて

東

二

順

右

拜

通

東

二

順

右

通

拜

東

東

舎りても何朝貞の花の露

右 無もさなから有心ちする

たらちねに子は似たるこそ哀にて

大法の池の底なる菊の花

打霞む梢を花の面影に

面影を梢に残す花散て

みし花の面影に立みねの雲

あやしきは遠山娘の菴（カ）にて

うらみこそおもえは神の姿なれ

卅五

左 小夜更ぬらし人もしつまる

白浪の立寄里はおほつかな

詩を誦して月を憐む声や誰

明日は春とおもへはのふる心にて

里とへはとかむる犬の声絶て

独たゝ心細きはね覚にて

たき捨る御垣の篝ほのかにて

立すかる市のかりやの火も消て

二

右 月も残らてくらぎ暁
物すこく聞ゆる鳥のから声に

順

一声は我さへすこき岩や戸に
村時雨生ふる紅葉の下臥に

通

冷しきかけ頭るゝ天津はし
灯をかゝけ尽せる窓のうち

拜

雲まよふ空や時雨に成ぬらん
鐘遠き野守の道はおほつかな

二

卅六

左 風の便に花そちりくる

中垣を春の憐（カ）のへたてにて

雪そゝく春の隣や近からん

谷水のなかれて霞む琴川

右 落葉かつ／＼積る木の下

山里は人待ほとに秋暮て

雨露はさらにもいわし庵の内

冬のくる道芝しるし霜置て

冬近き山里いかに住ぬらん

順

右

通

拜

東

二

順

右

拜

順

右

拜

順

右

通

拜

東

二

時雨降山風寒く吹出て

とふ人もうとく成行門古て

かくれ家の道は無にも秋の来て

卅七 祝言

左 言の葉の品はさまく替り来て

ならの時より久し君か代

おさめは同じ御代の末く

豊のあかりの絶ぬ君か代

ひとつ心にははふ君か代

君か千年をいはふ初春

直ぎに続く御代の久しき

わきて直なる君か代の時

右 仰には何か空しき神慮

きみか代おもふ住吉のまつ

人の国より増るわか国

治めもて来し代々の皇

北野ゝ宮に猶つかへまし

ひろこる氏の社とほしの

卅七

東

二

右

順

順

右

通

珎

拜

東

二

順

右

通

東

二

二

能順・政所「右」前句付之奥書

右卅六番連歌合は、若き人々此比のもて遊ひとて興有
事なれば、前句をひそかにうつし取て、口にまかせて
残りなく付て見侍るに、浅ましく見苦しき事ともに
て、初学の若人々にもさしつかひつへき句さまにもあ
らす。つらく古き連哥合をみるに、皆昔の功士たち
の年月つもりぬる秀逸の句の中より、それくつか
ひに似合つへからんをひろい取てつかはれたる事なれ
は、何かはをろかなる事も侍らん。今此一巻はなへて
の

「以下 落丁」

横山内記知清作品

△作品（中）一〇▽

天理図書館本
翻刻第四一〇号

天理図書館所蔵、写本『連歌集 笠月等
百韻外』△れ42―4▽の(2)による。

天和四甲子年三陽廿九

横山内記興行

水をみるにむへも道ある雪間哉

昌陸

今朝は氷をなかつ川波

知清

谷風のさそふ鶯巢をいてゝ

昌純

こかけのほかも梅かほるらし

昌倫

とはるゝは竹よりおくの住所

昌坪

涼しかれとて窓ひらく也

清長

詠はや軒にさはるのな空の月

能愛

秋の螢はほのかなるかけ

如延

夕霧や水のまに／＼うかふらん

道武

時雨にぬれて舟いそく袖

昌億

川顔は冬立しより吹嵐

執筆

散や生田の森の丹葉ゝ

昌陸

居る鶯やねくらをかへて声すらん

知清

深き夜もたかかよふ真砂地

昌純

翁さひさそおこたらぬ宮めぐり

昌倫

四手ふる袖のいたく古けり

昌坪

禱する恵みはしるき雨そゝき

清長

身にしめてよむ哥のあやしき

能愛

此度も司のめしに入けらし

如延

御階の月はなをあかぬかけ

道武

暮る迄南のとのゝ花盛

昌億

ひろき馬場の春は閑けし

知清

二三月より聞定ぬる郭公

昌陸

霞あはれみのそむ山の端

昌倫

人の世はかはかり也と残る日に

昌純

帰る舟路の跡のしら浪

清長

いとはやも雪もてきたる沖津風

昌坪

閉よとさゆる苦の屋の門

如延

聞ゆるや暮ぬと告る鐘ならん

命のうちはなをたのまはや

一筆のかへしもかなと書やりて

思ひ初しはまたいはけなき

なるゝこそ筒井のもと袖ならめ

しほるれはまたときあらひきぬ

月もうき田舎わたらへ立帰り

いかに難波の秋はさひしき

ニッ 今日すかる市女の姿ひやゝかに

霧もあらしも晴つくす也

明過る楨の梢は貞にて

舍出つゝなく山からす

鷹飼は手に帰らぬを尋ぬらし

よからてうしや君か御気色

無玉の残す恨はいか計

うつせ北野の神とあかめん

小泊瀬や仏のむかし忍はれて

むかふ心の月も晴けり

能愛

昌億

道武

昌陸

知清

昌純

昌倫

昌坪

清長

能愛

如延

道武

昌陸

知清

昌億

昌倫

昌純

清長

あらたにも涼しき池の水鏡

苔のみつらや夕露の庭

岩垣のめぐりも白き花の雪

去年の枝折は分ぬをく山

三三吉野や行末遠き八重霞

たのむの雁の帰にし空

そなたそと都のかたを思ひやり

妹夢にみる旅は物うし

忍ふこそ我紐ゆひし名残なれ

むなしき跡のはかなことの葉

小車を下立ぬるは俄にて

おかせるわさやいかにつみ人

巻／＼の文にしるしゝ政

つたはれる代は久し皇

とうとくも仰くは三のたからにて

松のお山やちかき鳥の音

月影もあけの玉垣明はなれ

露もさなからなひく白木綿

昌坪

昌陸

知清

昌億

道武

昌純

能愛

如延

昌倫

昌坪

昌陸

知清

昌億

道武

清長

昌陸

昌純

能愛

三ッ
霧にしも神楽の袖はしめるらし

よそのね覚もはた寒き比

とはぬ夜は枕かなしき秋の風

ゆかも海とやかくるあた波

江の村の人そこなへる高汐に

いかれるいを引網もやは

うときさへたのむは法のちかひにて

いたるへきもやいかに彼岸

住吉はまた遙なる道ならし

はふらすまゝに哀身の果

白髪はならぬ思ひのつもりにて

古き枕の敷たへは何

花をさへめてぬ葎の宿の月

霞む夕はすこき琴の音

名
春雨に山下水のみなきりて

筏の棹をさしわひぬらし

菅笠をきたる形もやせ男

暑き日かけにいとゝかれない

如延

昌億

知清

昌倫

昌陸

昌純

昌坪

清長

能愛

知清

道武

昌倫

昌陸

昌億

昌純

如延

昌倫

昌陸

御格子もあけ渡しぬる朝旦

まはゆき物やなれぬ別路

をかて猶かさす扇の恨しれ

秋になすをも忘れやはする

いひかはすその夜も長き私語

涙も露も払ふさむしろ

いにしへの月にもあらず月更て

錦のとはり住かへし跡

たまはるは猶さか行や上局

氏の中にてしる后かね

名ッ
大原の社やたれもまうすらん

わたる川瀬や浅き方々

つかれぬる駒をはしはし乗捨て

終にその名やとくる戦

つくる詩はいかにことなる心はへ

きひはなるよりさそなかしこき

散なんとこてふもうたぬ花の陰

えならすをくや若草の露

昌億

昌坪

知清

能愛

清長

道武

昌坪

昌億

昌陸

昌純

能愛

昌坪

如延

昌陸

昌億

知清

昌純

昌倫

昌陸	十三	能愛	九
知清	十一	如延	八
昌純	十一	道武	八
昌倫	十	昌億	十一
昌坪	十	執筆	一
清長	八		

年まで出座の芝神明宮神主・西東左近(刑部)。次項所出の石出帯刀吉深(常軒)や日輪寺・其阿(柳営御会連衆)など一座の作品を多く残している。亀戸天神の八百年御忌二千句の初千句には何故か各巻一句(初一順)だけ見えている。

〔注四〕鶴崎・田中両氏により紹介された前出(一八〇ページ)頼政神社蔵「諸大家連歌帖」の(9)、正保3年3月20日・初何百韻は、知清にとっても吉深にとっても早いころの作品である。(初一順のみ左に引用)

〔注一〕加能連歌壇史叢草・その一(白山万句——資料と研究)所収)に横山内記知清出座の百韻四巻を収めたのは、常陸下館の城番などを勤め、元禄2年12月29日に69歳で歿したこの連歌好きの幕臣が、他ならぬ横山長知の四男であるから

による。当百韻も前掲諸作品の次の年の興行で、連衆も多く重っている。そのうち

〔注二〕能愛は、北野宮仕の連歌好士でのちに上府、湯島天神喜見院の堯盛(明暦3)寛文13、柳営御会連衆)のあとをついだ能愛その人と思われる(ただし、柳営御会には出座せず)。能順伝資料の一・北野学堂連歌資料集(貞享年間)に収めた北野宮仕の「衆中親子書」(貞享5年1月)には「能愛(先々能通子)」とあり、次回の親子書(元禄4年3月)には「能通子 今之能通伯父 江戸湯島天神喜間院ニ罷在候」と見えている。

〔注三〕同じく連衆の清長は、柳営御会に延宝3年より元禄15

行春に引とむへき袖もかな
 あかぬ色なる桜ちる暮
 山風に霞のひまの月見えて
 小雨はるれば嶺さたか也
 岩根ふみ越ぬる道の露すまし
 かたへ苔むす末の川橋
 くつれそふ堤に波のかけ捨て
 わかれていつち水おつる音
 作なすわか里さとの小田の原
 雨に野山のみとりなる比
 なひきあふ竹の林ははるかにて

女的 16
 吉深 9
 知清 10
 其阿 10
 昌穩 11
 昌佐 11
 相也 10
 守治 9
 円心 9
 仙閑 4
 友安 1

△作品(中) 一一▽

小松天満宮・北畠宮司家所蔵、写本

『能順・快全・歎生等連歌書留』による。
同所蔵『快全・能順等百韻連歌集』にも。

「貞享元年九月十九日」

「相嘗教順追善」(別本によ)

長子におくれし比 哀傷百韻

したはしよ残るそ恨老の秋

能順

露けき宿の月しほる袖

虫の音も夜寒の床に目は覚て

草の枕に明やらぬ空

誰が待先いそきて出る旅の道

梶の音する江の泊り舟

浦風も騒て塩や満ぬらん

打むれつゝも鶴そ啼なる

霜ウ白き山田の原の末かけて

朝気わつかにけふりぬる里

一村の垣はの竹は浅からん

余波見えたる卯の花の宿

夏の夜はまた月なから明けらし

端居涼しきうたゝ寝の袖

問来れば待顔などかかこつらん

かつわすれ行心ならずや

日にそひて憂はわりなき此歎

もろき涙をいかゝ忍はん

いさゝらは語り残さし身の昔

情はみえつ山里の文

花散し木陰の夕立さらて

長閑き雨はしらすぬれつゝ

二 はかなくも露にこてふや眠るらん

楽しみ何かかへりみもせよ

君は猶そしりにもるゝ物ならて

伝へ来にける文のかしこき

千里をも雁や翅に任すらん

雲もひとつの秋風の波

冷しく海辺の月にの打時雨

遙に昏るゝ磯の松はら

仄なる焼火の影の見え隠れ

帰るさ悲し跡の他し野

古郷もあらずなる迄旅にへて

二度逢も命也けり

今は只のかれぬ宿縁いとふなよ

独り住むはいかゝ過さん

ニッ年もまた残りあまたの向後にて

雪に侘つゝ春をまつ山

寂しさや楯計をや頼むらん

寐られぬ夜比見る月もなし

打しきる礎の音を枕にて

秋の嵐のやとりかる袖

末遠き野原笹原分暮し

とひつゝ来ぬる玉ほこの道

忘れめや手馴れの駒も妹か里

名残おしくも別つるそら

俤に見ゆる花のみ春のいろ

霞もいまた霜の梅か枝

此朝待鶯の啼初て

立出る野の気色しつけし

三 行水や緑につゝくうす煙

里をかけたる竹川の末

うたひ来る大宮人の声添て

神の御前の袖のいろく

奉るぬさにもしるき心はへ

くしも扇も匂ひえならぬ

はゐさりし跡も床しき帳の内

本意ならず共見すはすくさし

人妻に返し一筆恋初て

あわれとしらは思ひ絶なん

安けきをうらやみけるか草庵

萩咲垣根行やらぬ袖

古跡にのこれる月を尋来て

秋は高津の夕淋しき

三ッ 浦波に音して通ふ難波風

啼や千とりの友求むらん

頼もしき事なき鄙の身は一つ

ゆるしもまたむ左遷もこそ

齡経ていとゞ明日をもしらぬ世に

何をむさほる心なるらん

柴の戸もとみける物を花紅葉

月の為には軒をあらしつ

須磨の浦や関吹風を身にしめて

行舟はやき夕霧のなみ

遠近に高き山／＼打詠め

杖をとゝめて詩をそ嘯く

酔てたに猶酒はたやあかさらん

知るもしらぬも市の交り

名

遠津国の方々かくる都路に

世の治とや守る関の戸

浅からぬ心ありてふはらへ草

恋する人よいかにくるしき

仮初も待は久しとおもほえて

かわす枕のあへす明行

解ぬるを見るに哀や増るらん

司高きも墨染の袖

思ひ入法の道こそ只ならね

雲の八重立奥の山寺

杉村の暮仄かにも鐘なりて

嵐しつまり雪そはれたる

寒渡る月の光や更ぬらん

夜半にうかれて鴉なく声

名ッ
心してあかぬ別をいそくなよ

よしや馴ての今は忍はし

数ならぬ名をとはれても物うしな

是より深き山に入はや

後咲る花の木の本猶とめて

芝生のすみれつみそふる袖

忘れめやはやくの春の跡の道
去し仏の手向うけなむ

△作品(中) 一二〇

大阪大学文学部国文研究室所蔵・含翠堂(土橋)文庫本、写本『連歌集』△H8・19Vの(3)による。

元禄「元」年戊辰三月

賀州於山代湯本

山白く明ほの匂ふさくら哉

政在

峰行月の朧なる影

可春

帰雁浦波遠く跡みへて

能順

こき出にけり沖の釣舟

在

閑なり雨より後の朝朗

春

ひらく扉に竹戦く音

順

引かこふ里の片への小田の原

在

昏れは鹿の立ならず道

春

ウ 秋風に尾花村へ打散て

順

月もこほるよしら露の色

在

初霜の置程もなく明渡り

春

草のまくらを敷や捨らん

順

山越は行衛も遠き旅の袖

在

宿はいつくの夕暮の雲

春

あくかるよ心や身をも離らん

順

おもひあまると告しらせはや

在

玉章にそふる泪もかきくらし

春

無人さらに忍ひ出つゝ

順

住あらずむかしの跡を問寄て

在

物寂しけに鳥ぞ鳴なる

春

花落る木間に薄き入日影

順

一むら松の霞む山本

在

ニ 残れるは猶珠しき春の雪

春

今朝狩衣立出る道

順

吹しほる袖の嵐や寒やらん

在

薄か陰に哀むしの音

春

古塚の秋の夕を形見にて

順

身にしめつゝもしたふ俳

在

慰る夢なさそひそ夜半の月

春

思ひ絶しを何松の声

順

爪琴を聞しる人もあらさらし

在

鄙の住りとなれる悲しさ

心より外なる罪にあたり来て

さえかしこきは妬む世中

ひとしきを友とすることを習なれ

岩木の陰に庵は結はん

ニッ 水流深き山へに花咲て

春も昏ぬや猶鳥の声

引籠る戸さし閑に打霞

はれすも雨のそゝきぬる空

大方に思わは来めや夜の道

さのみには月に別急くな

言の葉の色も尽せぬ恨にて

露けき袖に老を憐め

幾度か人にをくれて残るらん

舟待侘てくらす河つら

此里は爪木を頼む冬の日に

雲降なり片山の陰

一夜をも明兼たる篠枕

春

順

在

春

順

在

順

春

在

順

春

在

順

春

在

順

春

在

いかて木曾路の末は凌(マコ)

旅立る身は浅林衣の浅ましや(マコ)

安からぬこそ世を渡るさた

言かわす声も聞えて近隣

暮深めつゝ刃(マコ)ひよりはや

道野へにもゆる螢も我思ひ

夏草しけき恋とこそなれ

かり初の見るめはかりに袖ぬれて

人の歎そおもひやらるゝ

はかなしや後の報も知らざらん

重荷に馬を休めしもせず(マコ)

末かけてさかしき道の岨伝ひ

拾はゝいつこ陰の落葉

心してふましや月の村紅葉

秋の時雨の降通る跡

三ッ 川波の声打そへて鳴千鳥

塩さし登る湊杵けし

倍しさを住もちいさき海(マコ)

順

春

在

順

春

在

順

春

在

順

春

在

春

順

在

春

順

在

る筆をもて書付侍る。このつぎの和漢も如幽なるへし。この書、秋の木の葉のちり／＼に、文庫やうの物の内に有しを、一二の跡を尋つゝ、一冊となし侍る。又おなしはこ物の内に、本紙ともいふへくて一冊になせる有。これをも見合て、紙の次第をあらためしも、又あやまちや有へきのみ。

土橋 保長



于時享保二十乙卯五月十三日

此つぎの和漢は母貞順をさなきときの筆なるへきともみゆ。又如幽ともみゆ。まへに如幽老なるへしと書るゆへ、又おつてこゝにします。

△作品（中）一三▽

大阪大学文学部国文研究室所蔵・含翠堂（土橋）
文庫本、写本『連歌集』△H 8・19▽の(4)

和 漢

見る人のしけきにとまれ花の宿

風早中納言

禾

弄春 竹裏 鶯

月も猶霞む明ほの雪晴て

うち出る野の遠かたの山

いつくとも思ひそ分ぬ旅の道

海雲 隔楫 声

潮頭 風作 雨

楼上 夜伝 更ウ

螢也 一灯 影

憑(カ)まむ友を待は誰そも

月遅き夕の道にいで

霧の内なる男鹿鳴声

澗水 浸 紅 葉

岸風 掃 緑 檉

燕飛ふ浪間に舟を維き捨

人影遠く入日霞めり

けふりたつ岡の里の幽にて

柴扉 有 二 犬 鳴

勘解由小侍

不清

能順

随恩

能作

日峰

三位

執筆

清

禾

恩

順

峰

音

禾

作

順

清

夜閑 婦 醉 客

随 信

ニッ 聚 蚊 雷 襲^{ワッ} 夢^レ

音

年 暮 戰 攻 兵

峰

いとしも暑き夜半のうたゝね
月くらき庭に篝をさし置て

恩

義 氣 寒 霜 鬢

音

よそひ殊なる此秋の宮

作

あはれふたりにあはんともせず^(カ)

恩

染 思 御 講 葉

禾

ニ 玉 章 の 流 石 情 を 道 して^(マ)

作

含 嬌 上 苑 英

音

ひなひなからも読哥の品

禾

彩 霞 残 夕 日

清

遷 謫 愁 鳥 月

清

過 行 春 の の お し ま る ム 山^(マ)

峰

音 づ れ 来 ぬ る 浦 の かり かね

順

い つ く ま て 帰 ら ん 鳥 よ ま て し は し

禾

晚 吹 揺^ニ 芦 荻^一

峰

こ と ヲ わ ま ほ し 来 し 方 の 里

作

秋 陽 照^ニ 稻 杭^一

信

源 頭 漁 輟^ト 棹^ム

信

片 分 て 時 雨 降 なる 山 本 に

恩

塞 外 土 揚 旌

峰

僧 錫 有^ニ 雲 迎^レ

音

棚 引 る 峰 の 白 雲 村 一 へ に

順

今 し は と 乱 ぬ 終 た の も し な

禾

今 朝 め つ ら し き 松 の 薄 雪

順

至 り ふ か く も な ら ん 絃 管

作

三 こ ゝ ろ し て 庵 り 尋 む 人 も 哉

恩

昔 時 の 賢 き 治 め お も ふ 世 に

順

う と ま れ 来 て は 世 を も い と ふ 身

作

重^レ 色 国 將^レ 傾^シ

清

涙 紅 青 草 塚

禾

洗 恨 五 湖 蠡

信

香 暗 紫 藤 棚

音

離 騷 三 楚 平

峰

清

清

加能連歌壇史藁草・その二（中）（棚町）

水の音霞にむせふ垣めぐり	恩	鶯や枕の眠りいさむらん	順
外面の小田の蛙さびしも	順	氷も声をそふる谷川	禾
月にはやそくあまりに影澄て	禾	水近き岩ねの草のひこはへて	恩
夜冷漏台盈	音	鞭馬路崢嶸	清
露落叢間滑 <small>ナリ</small>	峰	鶏語曉関月	音
風過樹杪軽	信	忍ひ通ひの袖の露けさ	順
空蟬のはかなき命残るらし	順	<small>名</small> いかさまにしてかかこたむ胸の霧	禾
千とせの後は噺な白鶴	禾	残せる法のおしえ聞はや	恩
鶺鴒為 <small>ニ</small> 吾翁 <small>一</small> 奉 <small>ヲ</small>	音	此寺やその世久しく成ぬらん	順
碁因 <small>ニ</small> 相敵争 <small>一</small>	峰	南朝雲只横	音
<small>三</small> ウ 偷閑夫別墅	不	薰風初霽雨	信
花も紅葉も折 <small>レ</small> の陰	順	霜月暫浮 <small>タマリミス</small> 泓	峰
雲水は浦の夕のなかめにて	作	筆硯梅軒下	不
波路をかへる沖の釣舟	恩	心うつすや霞む山の端	作
峰嵐の音あらましき志賀の山	禾	雁帰琴上曲	音
飛雪玉晶々	信	伴ひかにしとふいにしへ	順
茅屋履痕絶	峰	こゝろさし有てやとへる草の原	恩
芸窓詩趣生	音	明日をも我はしらぬ存命	禾

かたらひかほの手枕の月

同

只一筆も書なちらせそ

同

いにしへを思ふね覚の郭公

順

我はかり頼むる人となさまほし

故

つれ／＼と降山里の雨

同

いはけなくとも教たてゝむ

同

花はまた木（ナ） 計の色めきて

故

才なきを悔れと今はかひあらて

順

春とて今朝は梅か香そする

同

謀にもあへる哀さ

同

音聞は去年の嵐のそのまゝに

順

ニッ
間近くもともに鹿の夜の道

故

いとしも雪は深くつもれり

同

月は茂りに隠ろへる山

同

思わずも暮問るゝは情にて

故

竹に吹風物寂し窓の内

順

□有を（ナ） 何恨けん

同

音も霰のしつまれる跡

同

二人はよし憂身故こそつらからめ

順

雲帰る空寒けにも日は昏て

故

むくゐの程はしらぬ前の世

同

鴉鳴行水遙なり

同

いつまでと定かぬるは命にて

故

立出て北にむかへる江の辺

順

かけすも時にあいやしなまし

同

浜路をつたふ真野ゝ朝明

同

をくれても深山桜を尋見よ

順

鐘の声嵐の末にさそはれて

故

霞に遠き鳥の音そする

順

峰のあなたに寺もこそあれ

同

月残る春の関路の深き夜に

故

花をそふ山に暮さは暮を只

順

短かりけりかり臥の夢

同

ぬるとも霞む雨はいとわし

順

すさひとも思ふ心やとまるらん

順

雁は今帰らん方に思ひ立

故

此浦浪に身をや尽さん

三よそへ見る我形代は哀にて

曇る鏡に心をも知

涙さへ乱れにけりな朝寝髪

誰薫をか袖にとむらん

蘭尾花か本に脱かけて

やとる野原の月の片敷

秋の日や山越程に昏ぬらん

時雨に成れる雲の一むら

吹出る水上遠き河下風

いつくなるらん過る柴舟

入相の鐘鳴里は木隠て

野につらぎ道(マゴ)幽なり

古塚は狐はかりや通ふらん

聞しはいつら鳥のから声

三ッ分来ぬる山は浅くも成けらし

栖有けに烟のはれり

梢をも埋める雪の朝朗

同

順

同

故

同

同

同

故

同

同

同

故

同

順

同

故

同

順

松には風の猶残る音

大淀や波はかけても帰らん

ゆらるゝ貝は塩のまゝなる

藻屑搔跡いさきよき砂ぬて

影は霜ふむ秋の夜の月

冷しき星をいたゞく暁に

横たふ雁は枕なる山

白雲の高根の花に行やらて

春のこし路は身にもそわさる

改玉の年も侘人はかなしや

なとか氷の澄かへる(マゴ)袖

名もゆるをも忍ふる物を憂思

浅きになける恋は難面し

言の葉の世の戯に耳馴て

正しき方は廃れ行道

それならぬ罪に逢こそ悲しけれ

たすけを祈る住吉の神

西の海遠き波間に舟出して

順

故

同

同

同

故

同

同

同

同

故

同

同

同

同

順

同

故

秋来る風をまつそ覚ゆる

同

△作品（中）一五▽

草葉にはしほらぬ露を袖の上

順

小松天満宮・北畠宮司家所蔵写本、

月にいかなる夢の通路

順

『快全・能順等百韻連歌集』による。

我中やさこそは関も守ぬらん

故

元禄四年閏八月十日

をとしめらるゝ涯はくるしき

同

素庵「浅井政右」

今更に親類の末はかこつなよ

順

懐旧之連歌

とても此身ははふらかさなん

同

馴し世や恨にかへる老の秋

能順

名

をのつから花の山住所得て

故

寢覚の月に露しほる袖

侘つる庵の雪も残らず

同

夜を寒み雲井の雁の声更て

またし只うときはしるき春の友

順

峰の嵐や吹渡るらん

酔て眠れは寂しけもなし

同

松ならて落葉に残る陰もなし

爪琴はたつそふまゝに□くりて

故

いつしかとのみ雪を待るゝ

たかわす逢ん折頼めつゝ

同

杳々と狩出ん野を心にて

玉の緒の末かくすこそ深からめ

順

飼そへつゝも駒や休めん

さそな学の誉有へき

同

片辺には行水涼し小笹原

山深く成道の末く

鐘の声おほつかなくも日は暮て

降や詠のつれくゝの空

またしとは幾度思ひ捨つらん
うき人しもそ心にはしむ

浅はかに靡き安きは何ならて
はかくれぬるやはふれ果まし

聞たにも物うき物は他国

いかに見らん海山の月

秋の波荒磯伝ひ行くて

風冷しく暮る松陰

花の跡とへは古郷春も惜

いつくに認めん鶯の声

二 傍に雲雀鳴野の朝明

霞かくれの日は仄也

遠方の山の峡より雪見えて

北氣なるらし風の寒けさ

己さへ冬籠する窓の梅

植し軒端の竹深き陰

いつの間に古渡りぬる住所

有増の世を今ぞ驚く

定なき物と命を云くて
かはらん事は懸ておもはず

打解て見えし心ははかなしや

忍ふもしらぬ灯の本

月暗く雨噪しき夜半の床

板間折く稲妻の影

ニッ 触ぬれは衣手薄き秋の風

夕渡りして行泉川

千鳥鳴汀杳かに打詠

芦辺おしなへ霜枯の比

方くくに烟淋しき笹屋形

入日幽かに人帰るめり

朝より身をいとなみに苦しめて

仕ふる道そ正しかりける

花衣ゆるし赦さぬ色くくに

連なる春の小車の袖

常よりも霰走や増るらん

霞て月は庭の閑けさ

荒たるも心有へき宿にして

思ひ出れなは捨ん契りか

三 兼言の其一ふしをかこたはや

忍ふる物をなともらすらん

祝ふ此旅の別のうき泪

齡経る身そ明日も知れぬ

慰めん友よ待れす問はとへ

枕もとらし澄る夜の月

惜まるゝ秋も幾程残るらん

片枝散行紅葉ゝの色

情有人の為なる玉章に

恋には身をもいやしめんやは

こる計しけき歎もいかならん

忘るゝ草は生んともせず

来て見れば唯其折の塚前

裾野の原の暮の淋しさ

三ッ

水遠く山風吹て打時雨

舟人いつち過る河浪

行迷ふ淀の渡の事問ん

月またしはし出かての里

引留め身に入せこは見まゝほし

恨るときけは露の玉琴

古宮と成ぬる迄に住侶て

心の外の位をそ継

才有は家の筋にもよらされや

交りにける袖の数く

花も夢思へは誰か残るらん

暮て霞に帰る山里

春来ぬと先聞初し鳥声

東のかたの暁の空

名 関越て行も弥し旅の道

吹立ぬるや秋の初風

生田野の露の気色も見てし哉

鹿なく夕月なまたれそ

侘しさも思ひいれしの草戸に

消ぬ此身も今しはし也

快全（元胡）作品抄

△作品（中）一六△

小松天満宮・北畠宮司家所蔵、写本 『快全・能順等百韻連歌集』による。同所蔵 『能順・快全・歎生等連歌書留』にも。

せめて人哀計は懸ねかし
なと余波なく移り果らん
事毎に其時代こそ床しけれ
道の実は文に尽せり
祈ぬる心や天も受ぬらん
作るや広き民の悦ひ
新らしき都は殊に賑ひて
我立柚を仰ぎぬる嶺
名々鐘の音四方に御法や響らん
洩さぬと聞誓頼もし
末懸て中に何かはつゝまゝし
他めけはこそ更に逢見ね
問るゝも物の便の折ふしに
其里人は忘れしもせず
伴ひし花は形見に又咲て
梅の若枝の春を知陰

素庵空溪居士「浅井政右」うせ給ひし事、難波
わたりにて聞侍りし。其際の夢現たとる計の
ことくさを便につけて牌前に備奉りしも、猶
飽ぬ哀に百の句をつゝけて、今七々日を待得
て、彼御寺に手向侍るならし。

元禄四年九月廿三日

元胡上

世の哀時しも秋の夕かな
空は時雨の露かゝる袖
松風の木下臥に月更て
いつくともなく鐘幽か也
舟帰る水や閑に成ぬらん
浪は絶く氷てそ行

村くくの芦の戦も冴暮て

仄に鳥や打も鳴らん

ウ 日色も片辺移らふ山隠

たよふ雲の残る村雨

音たてゝ風一頻吹通り

宵過行て秋も知るゝ

月にさへ問ぬ心のいかならし

萩の声にも物思へとや

古にける宿の軒端の忍草

露さみたるゝ頃の淋しさ

方くくの螢に急く夕間暮

水の面や風渡るらん

花咲は匂ひに霞む志賀浦

山本遠き春の曙

白雪は消行野辺の名残にて

烟なからになひく竹の葉

ニ 影薄き芦の丸屋の夕附日

漸気色立秋風の頃

人知ぬ思ひの露も心せよ

甲斐無をなと身には入ぬる

恋侘ていむてふ月の空詠

かたふたかるは一夜しもうし

仮初も頓て移ひ果やせん

盛の花に手やはふれまし

鶯の来ぬれば己か垣根にて

荒ぬる跡も春にこそなれ

山風の音は其儘朝霞

浪漕舟や遠さかるらん

見目猶松浦の沖に留りて

懸し鏡の神の往昔

ニウ 譲有皇の代の次々に

名高き家は終におこさむ

いときなき程よりも只試て

哀をしらは知せ初はや

数ならぬ際とて思ひ絶もせし

恨るすしのなとかなからん

泪さへ古琴の緒の爪音に

馴にし里の松風の暮

山桜花も別の色見えて

野辺の霞の墨染の空

入相の鐘鳴寺の春淋し

飛かふ鴉寐にや行らん

遠江の水仄白く月出て

汐のさかひや浪の浮霧

三 船人の凌やいかに秋の風

暮ぬる里に衣擣声

幽なる道は浅茅か陰分て

かれぬ心を思ひしらなむ

今よりの行衛を懸る我契り

よしや恨し有し一ふし

哀^(マア)へはすさふるも世の理に

老はつる身の願はせよ

春を只急く計の歳暮

冬木に梅の木芽添色

散あへす垣ほの雪や烟るらん

伝ふ音する水の末く

苜渡す田面の月の影さひて

薄か本や男鹿伏らん

三ッ 秋寒き此夕霜のいか計

嵐の雲の下る山際

旅衣裾野の里に舍るらし

残りすくなき入日とそ成

木々の葉を誘ふ時雨の幾廻

落るね覚の泪覚えす

あちきなく物を思ふもさまくくに

なとかは人を待ならひけん

閑なる庵を心の花なれや

暮なは月に春の手枕

打解て霞を分る狩衣

山を限りの野路の杳けさ

篠原に霰降行跡見えて

傾ける日に風すさぶ声

名 檜柴の菴は残て人もなし

捨ぬる身はいかになすらん

思ふより外に心のうかれ果

物のけめける程の恠しさ

妬けなる言葉をしも打交て

あらそひあへるわさははかなき

教にや一の道の分るらん

結ひし跡は残る夏草

有明もこほるゝ露に影濡て

むかし語に袖しほる秋

著ならせる故も身に入苔衣

仏にかへる願憐め

思ひ立行衛も遠し泊瀬山

飼程はかり駒そとゝむる

名ッ 草滋き門も忘や果さらん

命堪すは情をも見し

後世の契りを今の頼にて

ねひ増らんを待や渡れる

打そへる親の心のいかならし

おもひ送るも遠き鈴鹿路

関越る嵐の花はしたひ侘

霞も残れ暁の空

△参考▽ 快全(元故・元胡)は喜多村屋二代目彦左衛門、剃

髪して惠乗坊。一名石良。『聯玉集』の詞書には374・697・725

・784と所出。後引の樽庵麥水『三州奇談』の伝えるように、

浅井政右とならぶ能順の雅友である。これまでに紹介した出

座作品は左記の四卷。なお後稿にまとめたく予定している人

物である。

△藁一―二―V p.525・△藁二(前)八V p.217(元故)・△藁二

(前)一一V p.226(元胡)・△藁二(前)一二V p.229(快全)

『三州奇談 卷三』巻頭「聖廟(玉泉寺)の夢想」より

爰に惠乗坊快全(又名石良)最も連歌巧にして、浅井政忠・

法橋能順と名を等うし、其頃此三子を以て達人とす。然るに

快全元禄十五壬午春、不思議の夢想を蒙りける。幸今年二月

下の五日、聖廟八百年御忌に当るを以て、其の法樂をして、

此夢想事を巻頭として、独吟一千句を思ひ立つといへども、

余縁にさへられ、聊本意を遂げざりしかば、快全密に思へら

く、速に跡を隠し參籠せんにはしかじと、忽ち在邑を出奔

し、此玉泉寺の廟社に籠り、七ヶ日を期とし全く此事をな

す。(下略)

▲漢章・その一 内容一覽▼

- △資料 三▽波着寺／安養坊／空照（白山諸雜事記）
 △資料 四▽北村宗甫（白山爭論記・白山一卷より）
 △資料 五▽脇田如鉄家伝記／源氏物語相伝之事（一華堂）
 ／古今伝授之事／岩崎と申年寄女中
 △資料 六▽梅林院祠堂銀之事／九津屋次郎右衛門
 △資料 七▽京都町人御用相勤申者共（御夜話衆の内）
 △資料 八▽浅井源右衛門政右（先祖由緒一類附帳）
 △資料 九▽日本行脚文集（金沢／白山詣／小松）
 △作品 一▽天正10年2月18日「花になを」源氏竟宴會
 △作品 二▽文祿3年3月4日「年をへは」高野山百韻
 △作品 三▽元和8年6月16日「涼しさの」深曾木祝か
 △作品 四▽寛永21年3月17日「開より」光高降誕夢想
 △作品 五▽「下地こかるゝ松の」板津左兵衛直頼独吟
 △作品 六▽明暦2年4月5日「蟬の羽に」直頼追善
 △作品 七▽明暦2年9月25日「松に菊」勸請祈念か
 △作品 八▽寛文2年11月8日「庭やこれ」宗因・政長等
 △作品 九▽正的・宗因兩吟「日々にくとき」ほか
 △作品一〇▽「五月雨は」政長等（11号より初一順再録）
 △作品一一▽正的・能順・直景 兩吟・三吟（三物のみ）
 △作品一二▽寛文4年5月 夢想（11号より初一順再録）
 △作品一三▽寛文9年正月 夢想（ ）
 △作品一四▽寛文11年「行秋の」横山内記・昌程等
 △作品一五▽寛文11年正月「雪はけに」正勝等 夢想
 △作品一六▽寛文12年8月19日「来る雁も」（別本23日）
 △作品一七▽延宝3年8月「いつくとも」他政右独吟（二卷）
 △作品一八▽延宝6年中秋「山中ニテ」政右・元流・能順三吟
 △作品一九▽延宝7年5月9日「6月朔 横山左衛門等四卷
 △作品二〇▽延宝8年2月10～14日 横山玄位等千句
 △作品二一▽延宝9年9月10日 直忠家之二見瀉文台開
 △作品二二▽天和3年正月19日～30日 横山内記興行（三卷）
 △作品二三▽「みたるなよ」横山内記興行。玄的等
 △作品二四▽「人心の卷 十四吟」本多政長等一門